

# 一般国道297号交通安全施設等 整備委託(埋蔵文化財調査)報告書

－ 市原市郡本遺跡 －

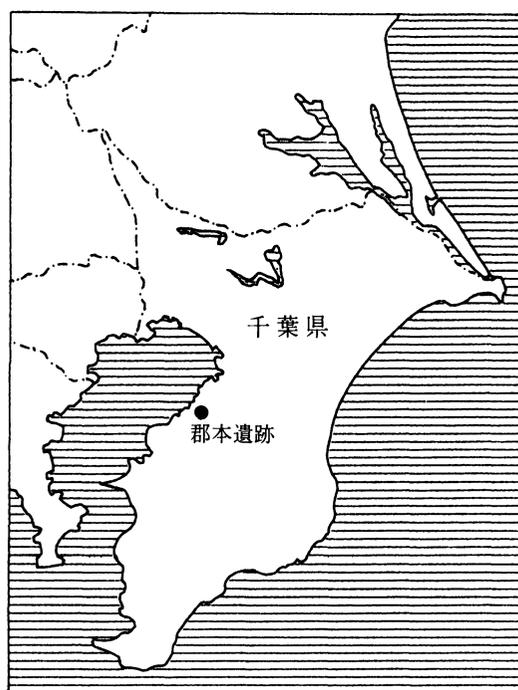
平成16年 3 月

千 葉 県 土 木 部

財団法人 千葉県文化財センター

# 一般国道297号交通安全施設等 整備委託(埋蔵文化財調査)報告書

いちほらしこりもといせき  
— 市原市郡本遺跡 —





SI-002 6



SD-001 33



北区 29

## 序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第491集として、「一般国道297号交通安全施設等整備委託事業」に伴い実施した市原市郡本遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この郡本遺跡は、上総国府地域内に所在し、官道跡や井戸跡などが調査され、また古代の緑釉陶器皿が出土するなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成16年 3 月25日

財団法人千葉県文化財センター  
理事長 清水新次

## 凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による一般国道297号交通安全施設等整備委託事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。  
郡本遺跡（遺跡コード219-065）
  - 平成5年度 千葉縣市原市郡本4丁目166ほか
  - 平成6年度 千葉縣市原市郡本1丁目149-1Bほか
  - 平成9年度 千葉縣市原市郡本1丁目76-1-2ほか
  - 平成13年度 千葉縣市原市郡本1丁目383-1ほか
  - 平成14年度 千葉縣市原市郡本2丁目420ほか
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載したとおりである。
- 5 本報告書は主席研究員相京邦彦が編集した。執筆は第4章2を上席研究員伊藤智樹が、ほかは相京邦彦が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、市原市教育委員会の御指導・御協力をうけた。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
  - 第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「蘇我」 (NI-54-19-15-2)
  - 国土地理院発行 1/25,000地形図「五井」 (NI-54-19-15-4)
  - 国土地理院発行 1/25,000地形図「海士有木」 (NI-54-25-16-1)
  - 国土地理院発行 1/25,000地形図「姉崎」 (NI-54-19-16-3)
- 8 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年に撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北であり、座標値は日本測地系に準じ、各年度に実施した基準点測量の数値に基づいている。
- 10 本書で使用した遺構番号は遺構別に把握しやすいように番号をつけかえ、遺構を示す略称を使用して記載した。
- 11 遺物の色調については、農林水産省・(財)日本色彩研究所監修、日本色研事業株式会社発行「新版標準土色帖」1988年 掲載の用語を使用した。
- 12 本書で使用した遺構の略称は以下のとおりである。
  - SI：竪穴住居 SK：土坑 SD：溝 SP：柱穴・ピット SM：塚

# 本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
1	調査の経緯	1
2	調査の方法	3
第2節	遺跡の位置と環境	5
1	遺跡周辺の地形	5
2	周辺の遺跡	5
第3節	基本層序	5
第2章	各年度の調査の概要と内容	7
第1節	平成5年度調査	7
(1)	調査の概要と方法	7
(2)	検出された遺構・遺物	7
第2節	平成6年度調査	7
(1)	調査の概要と方法	7
(2)	検出された遺構・遺物	7
第3節	平成9年度調査	7
(1)	調査の概要と方法	7
(2)	検出された遺構・遺物	7
第4節	平成13年度調査	9
(1)	調査の概要と方法	9
(2)	検出された遺構・遺物	9
第5節	平成14年度調査	9
(1)	調査の概要と方法	9
(2)	検出された遺構・遺物	9
第3章	検出された遺構と遺物	10
第1節	各遺構と遺物	10
(1)	竪穴住居跡	10
(2)	土坑・井戸状遺構	25
(3)	溝状遺構	26
(4)	塚	34
第2節	平成5年度A区から出土した遺物	34
第3節	遺構外出土遺物	40
第4章	まとめ	46
第1節	検出された遺構	46
第2節	出土遺物	46
報告書抄録		巻末

## 挿図目次

第1図	遺跡の位置図	第14図	SI-013・SK-006
第2図	周辺の遺跡分布図	第15図	SK-001・002・004・005
第3図	調査区およびグリッド位置図	第16図	SD-001・002・003
第4図	遺構分布図	第17図	SD-001・004・005
第5図	SI-001	第18図	SD-001・002
第6図	SI-004	第19図	SD-001・002
第7図	SI-005・006	第20図	SM-001(塚)
第8図	SI-009・010・011	第21図	A区遺物出土状況図
第9図	SI-008	第22図	A区出土遺物(1)
第10図	SI-002	第23図	A区出土遺物(2)
第11図	SI-003	第24図	遺構外出土遺物
第12図	SI-007・SK-003	第25図	陰刻花文の比較
第13図	SI-012・SK-006		

## 表目次

第1表 郡本遺跡遺構一覧

第2表 出土遺物観察表

## 図版目次

巻頭写真	1 緑釉皿	6 SM-001全景(西から)
	2 徳利	図版5
	3 染付	1 SM-001脇グリッド
図版1	遺跡航空写真	2 SD-001内ピット
図版2		3 SD-001
1	調査区近影	4 SI-009
2	調査区近影	5 SI-010
3	調査区近影	6 SD-001(018)
4	調査区近影	図版6
5	SI-001全景	1 SD-001(018)
6	SI-002全景	2 SD-002
図版3		3 SD-004
1	SI-003	4 SI-010
2	SI-003(カマド)	5 SI-013
3	SI-004	6 A区 SK-005
4	SI-004	図版7
5	SI-005	SI-001・002・003・007・
6	SK-001	011
図版4		図版8
1	SK-002	SI-007・012・013・SD-001
2	SI-006(炉)	図版9
3	SI-007	SD-001
4	SD-001土層断面	図版10
5	SM-001全景(東から)	SD-001・A区
		図版11
		A区
		図版12
		A区・SI-001・009・011・
		SK-006・遺構外出土遺物
		図版13
		遺構外出土遺物・スラグ

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

### 1 調査の経緯

慢性的な国道297号線の交通渋滞と郡本地先交差点の安全施設整備のため、千葉県土木部は国土交通省千葉国道事務所とともに国道297号交通安全施設等の整備を実施することになり、平成5年に千葉縣市原土木事務所は「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会に提出した。

整備対象となった市原市郡本地区を含む一帯は、上総国府所在地として以前から注目されており、市原市教育委員会（ふるさと文化課）では「上総国府推定地確認調査事業」として地区内の建設工事については慎重に対応してきた。このため、千葉県教育委員会と市原土木事務所は、整備対象地内の埋蔵文化財の取り扱いについて、その調査方法を含め協議を重ねた結果、やむをえず記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査を財団法人千葉県文化財センターが実施することになった。

発掘調査は、平成5年度から調査準備の整った地点から調査を開始し、平成5年度、平成6年度、平成9年度、平成13年度、平成14年度に実施された。これらの成果をもとに平成15年度に整理作業を開始し、報告書の刊行となった。

発掘調査及び整理作業の担当者と事業内容は以下のとおりである。

#### 平成5年度 発掘調査

調査期間 平成5月8月1日から平成5年8月31日

調査場所 市原市郡本4丁目166ほか

調査の対象 本調査 上層 479m<sup>2</sup>

検出遺構 竪穴住居5軒（弥生時代後期）、3軒（奈良・平安時代）、溝2条、井戸状遺構1基

組織 南部調査事務所 所長 石田廣美 担当職員 大谷弘幸

#### 平成6年度 発掘調査

調査期間 平成6月9月1日から平成6年10月17日

調査場所 市原市郡本1丁目149-1Bほか

調査の対象 本調査 上層 651.61m<sup>2</sup>

検出遺構 竪穴住居3軒、塚1基、溝2条

組織 南部調査事務所 所長 森 尚登 担当職員 高柳圭一

#### 平成9年度 発掘調査

調査期間 平成9月8月1日から平成9年8月29日

調査場所 市原市郡本1丁目76-1-2ほか

調査の対象 確認調査 下層 2m<sup>2</sup>/81m<sup>2</sup>

本調査 上層 81m<sup>2</sup>



第1図 遺跡の位置図

養

検出遺構 溝3条  
組 織 南部調査事務所 所長 高田 博 担当職員 渡邊高弘

平成13年度 発掘調査

調査期間 平成13年7月1日から平成13年8月21日  
調査場所 市原市郡本1丁目383-1ほか  
調査の対象 確認調査 上層 124㎡/709㎡  
下層 15㎡/709㎡  
本調査 上層 0㎡

検出遺構 竪穴住居2軒，土坑2基  
組 織 南部調査事務所 所長 高田 博 担当職員 行川 永

平成14年度 発掘調査

調査期間 平成14年8月1日から平成14年8月30日  
平成15年1月7日から平成15年1月17日  
調査場所 市原市郡本2丁目420ほか  
調査の対象 確認調査 上層 395㎡/510㎡  
下層 34㎡/510㎡

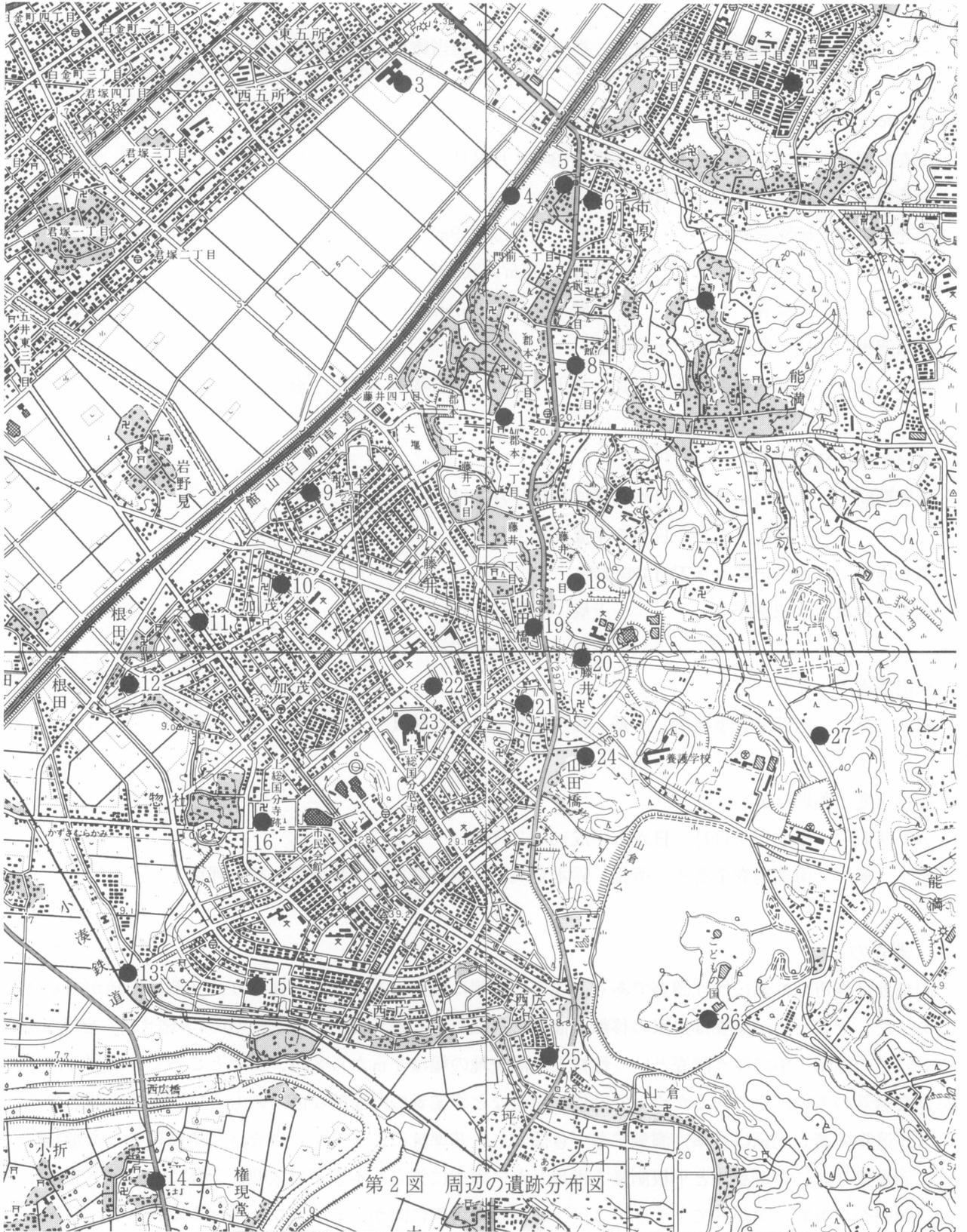
検出遺構 なし  
組 織 南部調査事務所 所長 鈴木定明 担当職員 土屋治雄

平成15年度 整理作業

調査期間 平成15年11月1日から平成16年2月29日  
組 織 南部調査事務所 所長 鈴木定明 担当職員 伊藤智樹 相京邦彦

## 2 調査の方法

調査地は現道の拡幅に伴う調査であり、現道の両側は民家および商店が連なり、一部に畑地がある状況であった。そのため、調査は民家の移転、商店の移転や建て替えが終了した地点から実施せざるを得なかった。現道の拡幅工事に伴う調査という性格上、調査地の幅は2mから3m、広いところで5m程で、すぐ脇は交通量の多い国道であるため、安全柵の設置など事業者の全面的な協力のもとで調査は実施された。遺構、遺物の調査記録は基準点測量に基づき設定した基準杭によったが、調査区が道路にそった形状のために簡易遣り方による測量と平板測量を併用した。調査に先立ち本事業対象範囲全体にグリッドを設定した。西側から東側に向かって1・2・3区、北側から南側に向かってアルファベットでA・B・C区をもうけ、一辺20mの大グリッドを設定し、西北隅の大グリッドを「1A」区と呼称した。さらに、この大グリッド内に一辺2m×2mの小グリッドを100個設定し、遺構の図化、及び出土遺物の記録に使用した。



- |            |           |            |             |             |              |
|------------|-----------|------------|-------------|-------------|--------------|
| 1. 郡本遺跡    | 6. 光善寺廃寺跡 | 11. 加茂台遺跡  | 16. 上総国分僧寺跡 | 21. 宮前遺跡    | 26. 孟地遺跡     |
| 2. 若宮遺跡    | 7. 能満城跡   | 12. 根田代遺跡  | 17. 唐崎台遺跡   | 22. 坊作遺跡    | 27. 能満上細工多遺跡 |
| 3. 五所四反田遺跡 | 8. 郡本古甲遺跡 | 13. 村上川堀遺跡 | 18. 郡本大宮遺跡  | 23. 上総国分尼寺跡 |              |
| 4. 市原条里制遺跡 | 9. 向原台遺跡  | 14. 西野遺跡群  | 19. 稻荷台遺跡   | 24. 山田橋表道遺跡 |              |
| 5. 市原城跡    | 10. 加茂遺跡  | 15. 諏訪台古墳群 | 20. 千草山廃寺跡  | 25. 山倉古墳群   |              |

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡周辺の地形（第1・2図）

市原市は房総半島のほぼ中央に位置し、北を千葉市に、南を袖ヶ浦市に接している。養老川が市の中央部を流れ、東京湾に流入する。東京湾沿いには広大な沖積地を形成している。この沖積地を望む台地上を市原台地と呼び、上総国国府の所在する本地域を通称国分寺台と呼んでいる。

郡本遺跡は、市原台地のほぼ中央部に位置し、標高21mから22mの台地上に位置している。周辺には国府関連遺跡が所在し、郡本遺跡と同様に国府関連遺構が検出されている。

### 2 周辺の遺跡（第2図）

市原台地西部域には上総国分寺跡を中心とする国分寺台遺跡群が、市原台地中央部には市原郡衙推定地が存在する。市原郡衙推定地中心部とされる郡本八幡神社が近くに所在する。

郡本遺跡は、財団法人市原市文化財センターによって住宅建替えに伴う埋蔵文化財調査が継続的に実施されてきており、その成果は調査報告書として刊行されている。

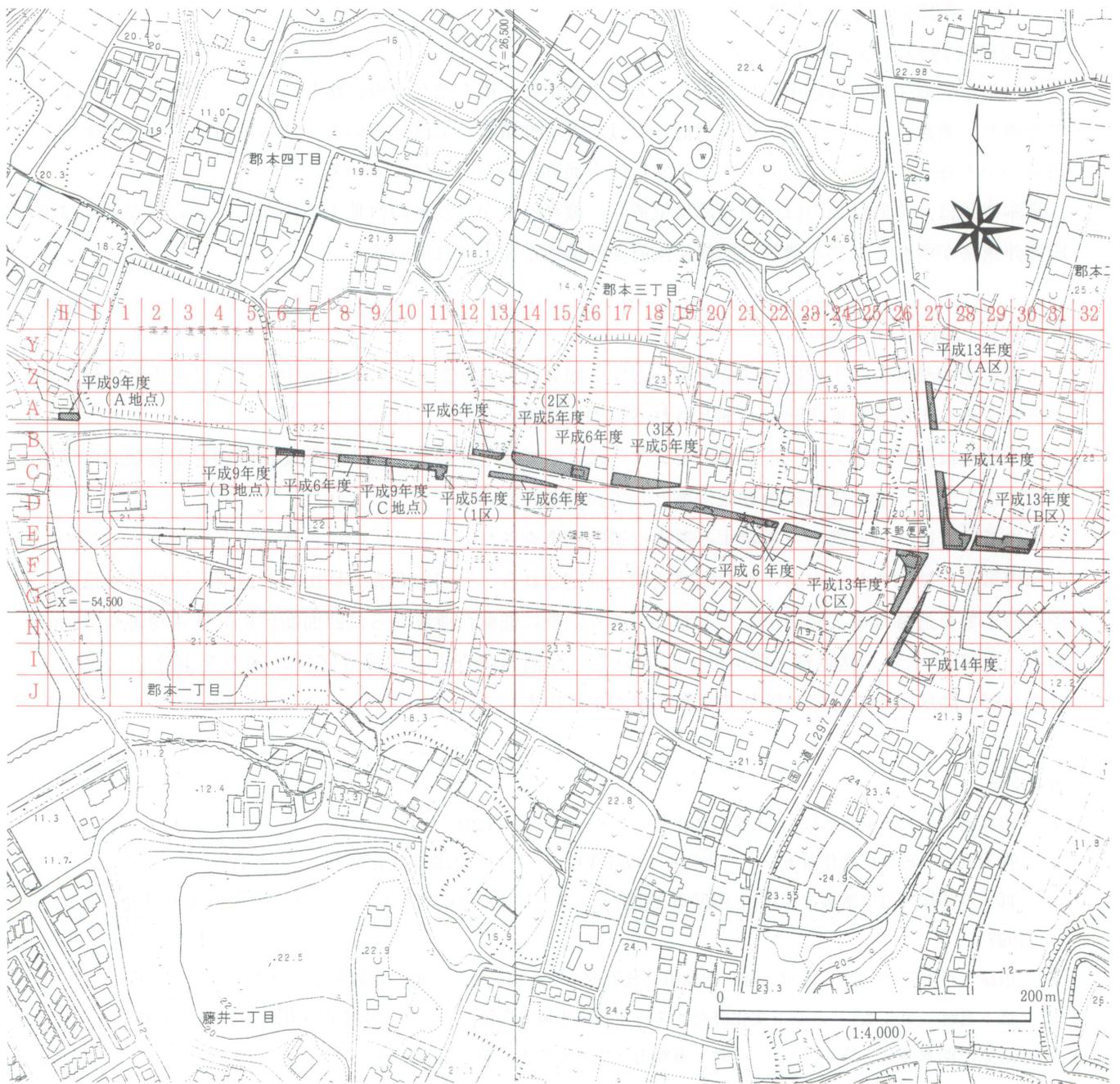
郡本遺跡では、市原郡衙を推定する遺構や遺物が調査されている。すでに古代道の存在が判明しており、今回の調査で検出された大溝はその関連遺構と推定される。今回の調査で検出した遺構と同時代の遺跡と周辺の主要な遺跡は第2図に示したとおりであり、特に稲荷台遺跡からは四面廂付掘立柱建物跡や緑釉陶器や、「貞観十七年」銘墨書土器が出土している。今回の調査でも平成5年度に調査を実施したS I - 002 堅穴住居跡からは緑釉陰刻花文輪花皿が1点出土している。

### 参考文献

1. 「市原市郡本大宮遺跡」（財）市原市文化財センター第41集 1991
2. 「郡本遺跡」市原市文化財センター年報－平成4年度－（財）市原市文化財センター 1996
3. 「郡本遺跡群（古甲遺跡第3次）」市原市文化財センター年報－平成6年度－（財）市原市文化財センター 1997
4. 「市原市郡本遺跡（第2次）」（財）市原市文化財センター第56集（財）市原市文化財センター 1995
5. 「郡本遺跡（第3次）」市原市文化財センター年報－平成9年度－（財）市原市文化財センター 2000
6. 「市原市郡本遺跡（第4次）」（財）市原市文化財センター第61集 1999
7. 「市原市郡本遺跡（第5次）」「平成10年度市原市内遺跡発掘調査報告書」市原市教育委員会 1999
8. 「郡本遺跡（第5次）」市原市文化財センター年報－平成10年度－（財）市原市文化財センター 2001

## 第3節 基本層序

調査区は幅が狭く、各調査区共通の土層断面の作成はできなかった。また平成14年度に調査を実施した地区は、近代の開発行為によりすでに削平されており遺構の検出はなかった。



第3図 調査区およびグリッド位置図

## 第2章 各年度の調査の概要と内容

### 第1節 平成5年度調査

#### (1) 調査の概要と方法（第3・4図）

平成5年度は、国道297号線の郡本交差点から大堤を迂回し稻荷台通りに続く五井本納線の整備事業に伴う発掘調査であった。五井本納線を挟んで郡本八幡神社が所在する。調査地点は郡本八幡神社側に1区、反対側に2区と3区の3か所に分かれていた。

#### (2) 検出された遺構・遺物

（遺構）1区はL字型をした調査区で、竪穴住居跡（SI-007・008）2軒・井戸状遺構（SK-003）1基と溝状遺構（SD-002）1条を検出した。2区は細長い形状で、竪穴住居跡（SI-005・006）2軒と土坑3基（SK-001・002・004）を検出した。3区もやや細長い形状をしている。3区からは竪穴住居跡（SI-001・002・003・004）4軒を検出した。

#### （遺物）各グリッドおよび調査区出土の遺物量

旧石器時代遺物としてはNo.2グリッドからフレイク1点、9.81gが出土した。

1区からは弥生土器67片、535.07g、土師器97片、603.82g、須恵器1片、21.01gが出土した。2区からは弥生土器1片、26.16g、土師器40片、263.53g、須恵器4片、33.99g、陶器3片、18.15g、瓦3片、253.35g、カワラケ3片、43.6gが出土した。3区からは弥生土器9片、154.37g、土師器36片、230.77g、須恵器2片、20.24g、陶器120点、8.38g、瓦6点、1733.41g、羽口2片、88.58gが出土した。

### 第2節 平成6年度調査

#### (1) 調査の概要と方法（第3・4図）

平成6年度は、郡本八幡神社近くの3地点と、神社から交差点の中間地点1か所・西位置に1地点の計5地点が調査対象地区であった。郡本八幡神社地区からは竪穴住居跡（SI-009・010・011）3軒と溝（SD-001）1条、塚（SM-001）1基が検出された。西側調査区からは遺構の検出はなかった。また、交叉点近くの調査区は削平されており、遺構の検出はなかった。

#### (2) 検出された遺構・遺物

（遺構）溝状遺構が2条調査されたが、この溝は平成5年度に調査を実施したSD-001（012A）とSD-003（012B）の延長部で、それに並行している溝2条、竪穴住居跡3軒、塚1基を検出した。

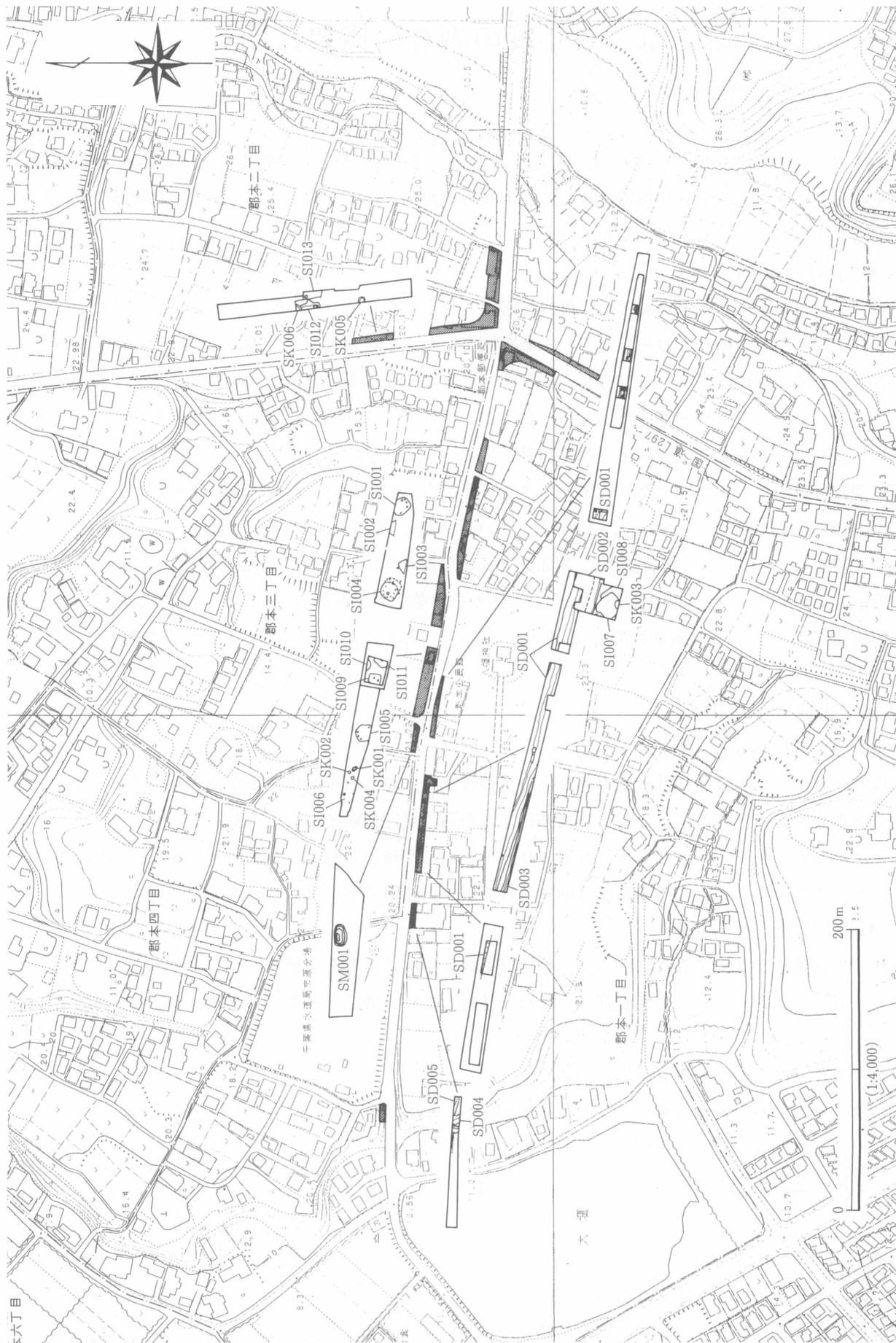
#### （遺物）各グリッドおよび調査区出土の遺物量

16Cグリッドの出土遺物は弥生土器25片、229.95g、土師器68片、477.51g、須恵器5片、119.63g、陶器2片、37.46g、カワラケ70片、479.37g、瓦1点、18.86g、その他1片、54.74gであった。9Cグリッドの出土遺物は須恵器1片、17.21g、カワラケ5片、38.38gであった。

### 第3節 平成9年度調査

#### (1) 調査の概要と方法（第3・4図）

調査区は3地点に分かれていた。郡本八幡神社脇の平成5年度と平成6年度調査区に挟まれた場所と、



第4図 遺構分布図

ほか2か所の3地点であった。最も西側の（A地点）からは遺構の検出はなかった。中間地点（B地点）からは溝（SD-004・005）2条が検出された。C地点からは溝（SD-003・SD-001）が検出された。

#### （2） 検出された遺構・遺物

（遺構）溝2条が調査された。溝2条は調査時では012Aと012Bであるが、溝の形状や方向などから、本報告では012AはSD-001と、012BはSD-002と同一の溝と判断し、平成5年度に調査した溝の延長部とした。

（遺物）各遺構からの出土遺物の数および数量は遺構の記載の中でふれている。

### 第4節 平成13年度調査

#### （1） 調査の概要と方法（第3・4図）

調査区は3地区に分かれていた。A区の北側約半分は2m以上の埋没谷であったため、それ以上の調査は危険と判断し掘削は中止した。C区の北側一部は、現地表から地山まで2m以上あり、近・現代の盛り土がされていたため安全上のため調査はこの深さで終了した。

#### （2） 検出された遺構・遺物

（遺構）A区からのみ検出され、竪穴住居跡（SI-012・013）2軒、土坑（SK-005・006）2基が検出された。

（遺物）A区から出土した遺物量は、土師器4697片、20306.1g、須恵器723片、6507.3g、陶器143片、682.09g、カワラケ96片、724.49g、瓦18片、791.62g、その他12片、142.78g、土玉1点、1.64g、土錘1点、2g、羽口1片、24.09g、縄文土器1片、29.17gであった。

### 第5節 平成14年度調査

#### （1） 調査の概要と方法（第3・4図）

郡本交差点を挟んで2か所が調査対象地であった。この地区はすでにローム面まで削平されていたため、遺構は残存していなかった。

#### （2） 検出された遺構・遺物

確認トレンチ内から土器片、瓦片が出土した。北側調査区からは近世の徳利が出土した。ほかに、2区からは弥生土器1片、3.67g、土師器3片、13.66gが出土した。3区からは、弥生土器4片、35.31g、土師器3片、16.6gが出土した。

## 第3章 検出された遺構と遺物

### 第1節 各遺構と遺物

#### (1) 竪穴住居跡（ ）内は調査時番号

SI-001(001)(第5図, 図版2・7・12)

平成5年度第3区から検出された竪穴住居跡である。形状は小判形を呈する。大きさは4.95m以上×4.42m, 深さは27.5cmである。住居跡の北東隅は調査区外に続き, 住居跡全体の調査はできなかった。調査範囲から支柱穴が3本と2本の小柱穴が確認された。炉は中央北側に位置する。住居跡の中央部はかたく締められている。周溝は部分的に巡る。時期は弥生時代後期と思われる。

出土した遺物は弥生土器81点, 総重量895.14g, 覆土上位から土師器37点総重量209.47gが出土した。

1は甕形土器の口縁部破片である。実測番号は3である。遺物番号は15である。色調は外面は黒色で, 内面は黒色である。底径は17.5cm, 器高は5.6cmである。成形・調整は外面は頸部ヘラミガキ, 輪積痕が見られる。内面はヨコナデを施している。胎土は砂粒を含むが良好である。焼成も良好である。弥生時代後期に属する。

2は鉢形土器で底部を欠損している。実測番号は35である。遺物番号は1である。色調は外面は赤褐色で, 内面は暗赤褐色である。口径は22.0cm, 器高は4.8cmである。外面には羽状縄文が施されている。内面はミガキ処理をされている。焼成は良好である。弥生時代後期に属する。

3は胴部から上部と底部中央を欠損している。実測番号は1である。遺物番号は1である。色調は外面は赤黒色から明赤褐色で, 内面は黒褐色である。底径は6.5cm, 器高は6.7cmである。外面はヘラナデのちミガキを施し, 赤彩を施している。内面はナデを施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。弥生時代後期に属する。

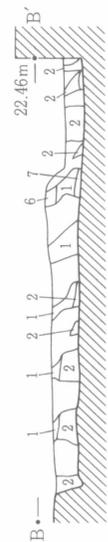
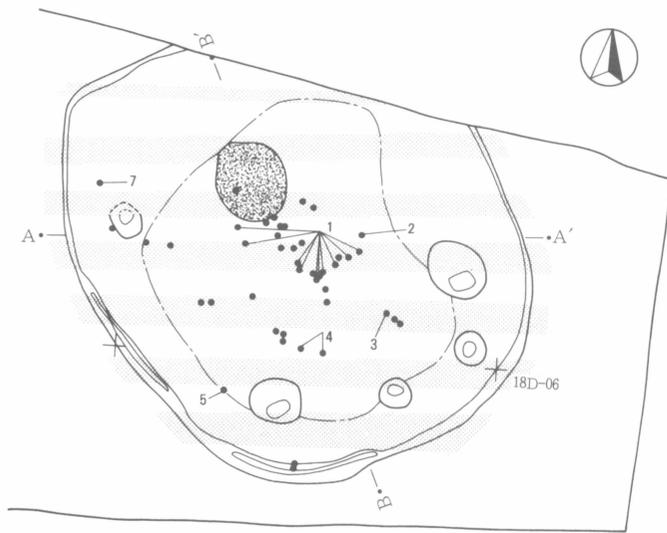
4は壺形土器の底部片である。実測番号は2である。遺物番号は39である。色調は外面は赤褐色から灰褐色で, 内面は黒褐色である。底径は6.0cm, 器高は5.0cmである。外面はヘラナデを施している。内面はナデを施している。胎土は砂粒を含むが良好。焼成も良好である。弥生時代後期に属する。

5は甕形土器の口縁部片である。実測番号は8である。遺物番号は7である。色調は内外面ともに鈍い黄橙色から黒色である。外面の口唇部にキザミを施している。内面はヨコナデを施している。胎土は良好である。焼成は良好である。弥生時代後期に属する。

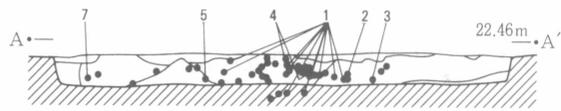
6は鉢形土器の口縁部片である。実測番号は6である。遺物番号は1である。色調は外面は鈍い赤褐色から明赤褐色で, 内面は鈍い黄橙色である。胎土は良好である。焼成は普通であるが全体に摩滅している。外面は口唇部に羽状縄文を施している。口縁部に縄文を押圧し, 赤彩を施している。弥生時代後期に属する。

7は壺形土器の肩部の破片である。実測番号は5である。遺物番号は9である。色調は外面は明赤褐色で, 内面は橙色である。胎土は良好である。焼成は普通であるが, 全体に摩滅している。胴部上段には横帯の縄文帯が, 下位には鋸歯縄文帯が施されている。弥生時代後期に属する。

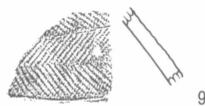
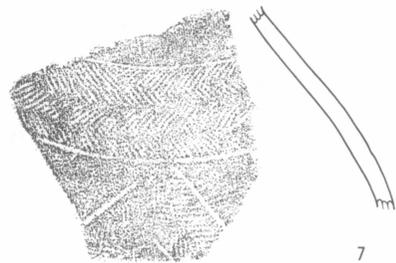
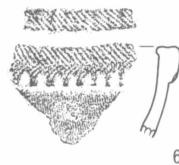
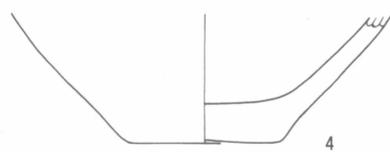
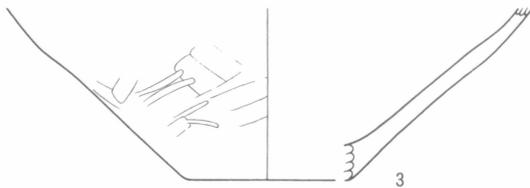
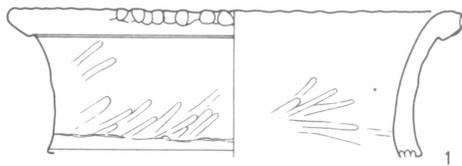
8は壺形土器の肩部破片である。実測番号は9である。遺物番号は10である。色調は外面は鈍い赤褐色で, 内面は鈍い赤褐色である。外面には縄文を施文し, 赤彩を施している。胎土は良好である。焼成は良好である。弥生時代後期に属する。



- 1 灰茶褐色土  
1cm大のロームブロックと炭化粒子を含む
- 2 茶褐色土  
ローム粒子が斑点状に見られ若干の炭化粒子を含む
- 3 黒灰色土  
焼土粒子、炭化粒子を多く含むローム粒子は少ない
- 4 茶褐色土  
2層と同様の層であるが、ソフトローム粒子を多く含む
- 5 ソフトローム粒子を多量に含む
- 6 暗茶褐色土  
若干のローム粒子を含む
- 7 黒色土  
多量の炭化粒子と焼土粒子を含む



SI001



第5図 SI-001

9は壺形土器の破片である。実測番号は10である。遺物番号は1である。色調は外面は明褐色で、内面は明褐色である。外面には羽状縄文を施している。内面はナデを施している。胎土は良好である。焼成は良好である。弥生時代後期に属する。

#### SI-004(004)(第4・6図, 図版3)

平成5年度第3区から検出された。竪穴住居跡である。形状は隅丸方形になると推定される。壁が浅く東南側は残存しないが、柱穴の位置で住居跡の範囲を推定した。大きさは5.95m以上×4.98m、深さ21.3cmである。炉は中央やや北寄りに位置する。柱穴としては主柱穴が4本とほかに小柱穴が検出された。住居跡の中央部はかたく締められており、小柱穴は硬化部との境にみられる。時期は弥生時代後期と思われる。

出土した遺物は弥生土器136片、1318.26g、覆土上位から土師器38片、264.01g、須恵器1片、4.94g、陶器2片、8.05gが出土した。

1は甕形土器で頸部以下を欠損する。炉内から出土した破片と覆土中の破片が接合した。実測番号は3である。遺物番号は15である。色調は外面は鈍い赤褐色から黒褐色で、内面は明赤褐色から黒褐色である。口径は21.0cm、残存器高は13.4cmである。外面はミガキを施している。内面はヘラナデを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。弥生時代後期に属する。

2は高杯形土器で脚端部を欠損する。実測番号は1である。遺物番号は38である。色調は外面は褐色で、内面は褐色から鈍い赤褐色である。口径は9.6cm、残存器高は6.3cmである。調整は外面はヘラケズリのちナデを施している。内面はナデを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。弥生時代後期に属する。

3は壺形土器の底部片である。実測番号は2である。遺物番号は3である。色調は外面は赤褐色から黒褐色で、内面は赤褐色から暗褐色である。底径は10.2cm、器高は4.7cmである。外面はナデを施している。内面はナデを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。弥生時代後期に属する。

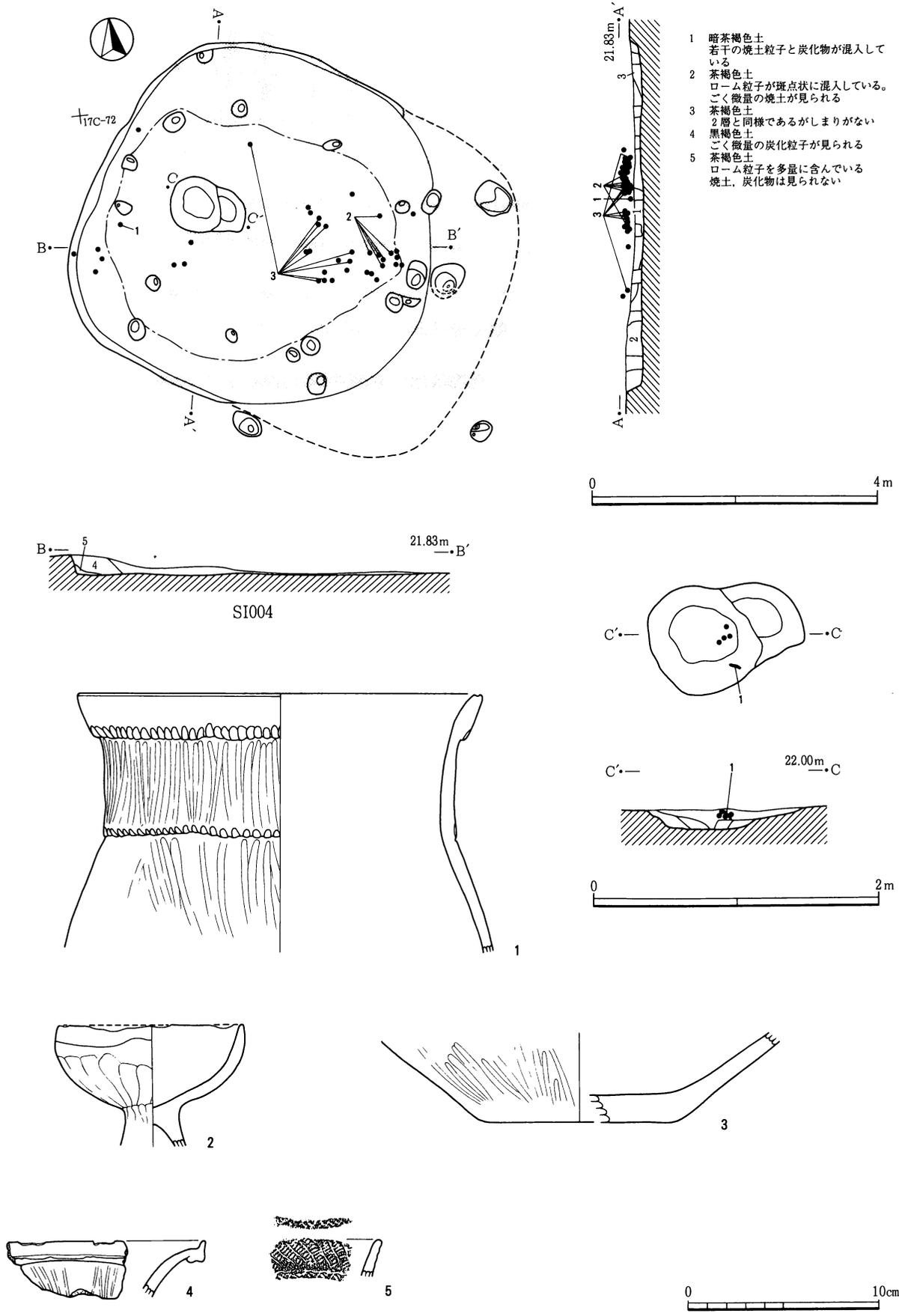
4は壺形土器の口縁部片である。実測番号は5である。遺物番号は44である。色調は外面は明褐色であり、内面は明褐色である。調整は外面はタテミガキを施している。内面はヨコナデを施している。外面には赤彩が見られる。弥生時代後期に属する。

5は壺形土器の口縁部片である。実測番号は7である。遺物番号は1である。色調は外面は明褐色で、内面は赤褐色である。内面はミガキを施している。胎土は普通である。焼成は良好である。口縁外面には異条斜縄文が施されている。弥生時代後期に属する。

#### SI-005(005)(第7図, 図版3)

平成5年度第2区から検出された。竪穴住居跡である。形状は隅丸方形になると思われる。南西隅が調査区外に続き、住居跡全体の調査はできなかった。大きさは5.0m以上×4.7m、深さ16.9cmである。炉は北寄りの壁際にある。柱穴は4本が検出された。3本は主柱穴で、1本は炉の北側にある。時期は弥生時代後期と思われる。

出土した遺物は弥生土器37片、215.83g、その他1点、11.46gである。図化できる遺物の出土はなかった。



第6図 SI-004

SI-006 (008) (第7図, 図版4)

平成5年度第2区から検出された竪穴住居跡である。形状は削平されており不明である。中央に円形をした落ち込みがあり炉跡と推定され、周囲に柱穴状のピットがあり住居跡と推定した。大きさは0.9m以上×0.75m以上、深さ15.2cmである。時期は弥生時代後期と思われる。図化できる遺物の出土はなかった。

SI-009 (015) (第8図, 図版5・12)

平成6年度調査区から検出された竪穴住居跡である。住居跡の西側の一部は調査区外に続き、住居跡全体の調査はできなかった。中央部に柱穴が1本確認できた。また貯蔵穴らしき土坑がある。住居の北壁と調査外との境に土坑があり、覆土中からは焼土が見られるが性格は不明である。炉跡の可能性もあるが明確でない。大きさは3.5m×2.9m以上、深さは15.5cmである。

出土した遺物は、弥生土器3片、6.37g、覆土上位から土師器20片、126.78g、須恵器1片、3.31g、カワラケ32片、129.7gが出土した。

1は壺形土器の口縁部で、約1/3が残存する。実測番号は2である。遺物番号は2である。色調は外面は鈍い橙色で、内面は橙色である。口径は14.0cm、器高は3.5cmである。二重口縁部に縄文を押圧している。内面はナデを施している。焼成は良好である。摩滅が激しい。弥生時代後期に属する。

SI-010 (016) (第8図, 図版5)

平成6年度調査区から検出された竪穴住居跡である。形状から住居跡と推定したが、柱穴等はない。床面もはっきりしない。大きさは2.6m以上×2.3m以上、深さは19.7cmである。時期は奈良・平安時代と思われる。

出土した遺物は14片、95.73gであった。図化できる遺物の出土はなかった。

SI-011 (017) (第8図, 図版7・9)

平成6年度調査区から検出された竪穴住居跡である。壁に沿って周溝が巡る。北側には別の遺構が重複している可能性がある。中央に土坑があるが、性格は炉跡とも思われるが不明である。床面は締まっている。大きさは3.3m以上×3.0m以上、深さは39.6cmである。

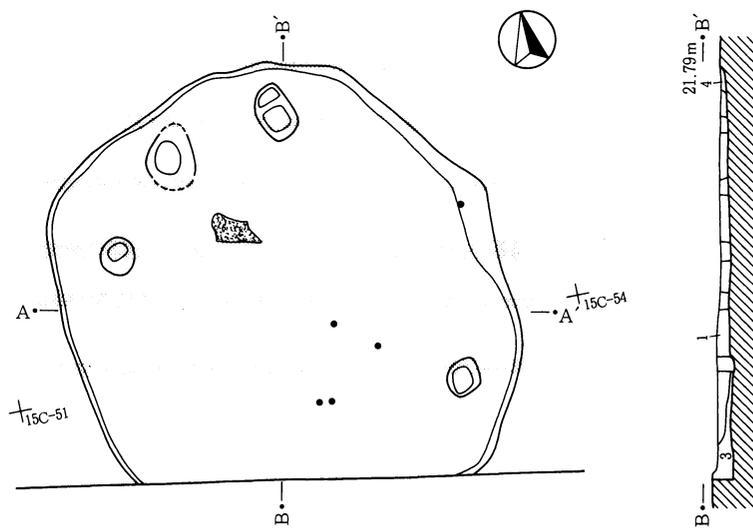
出土した遺物は弥生土器22片、147.6g、土師器36片、144.75g、須恵器1片、13.09g、カワラケ14片、9348gが出土した。図化できた遺物は混入した弥生土器である。

1は壺形土器の頸部片である。実測番号は2である。遺物番号は2である。色調は外面は明赤褐色で、内面は明赤褐色である。残存器高は6.2cmである。上部には縄文の施文がある。内面はミガキを施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。内外面ともに赤彩されている。弥生時代後期に属する。

2は口縁部片である。実測番号は6である。遺物番号は1である。色調は外面は暗赤褐色である。外面は羽状縄文を施している。内面は赤彩を施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。外面は赤彩されている。弥生時代後期に属する。

3は壺形土器の口縁部片である。実測番号は5である。遺物番号は1である。色調は外面は暗赤褐色である。外面はミガキを施している。内面はミガキを施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。口縁部には羽状縄文が施される。下端にはキザミが施されている。弥生時代後期に属する。

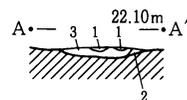
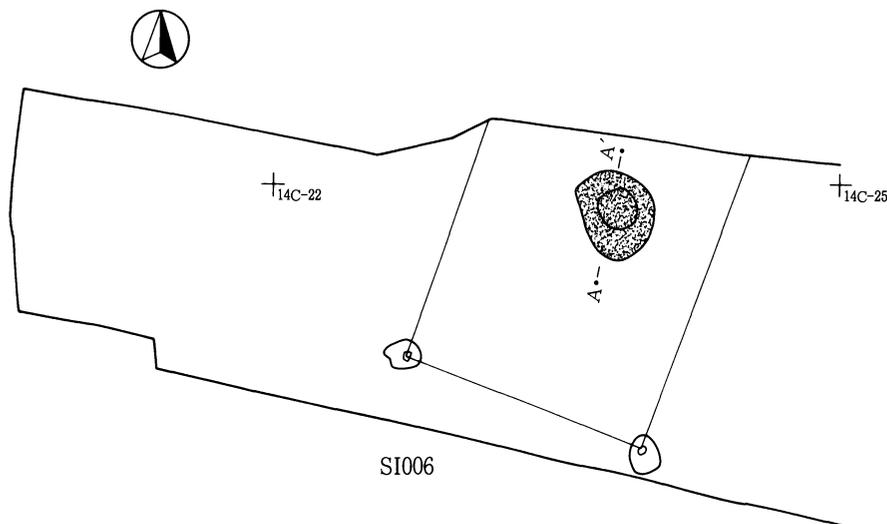
4は壺形土器の口縁部片である。実測番号は4である。遺物番号は1である。色調は外面は暗黒褐色で、内面は暗灰黒色である。胎土は緻密である。焼成は良好である。口縁部には羽状縄文が施され、口唇部は面取りされ縄文が施文されている。口縁部の下端にはキザミが施されている。弥生時代後期に属する。



- 1 茶褐色土  
2~3cm大のロームブロックを多量に含む。ごく微量の炭化物も見られる
- 2 明褐色土  
5cm大の大きなロームブロックを多量に含む
- 3 茶褐色土  
2cm大のロームブロックと炭化粒子を若干含んでいる
- 4 暗茶褐色土  
ほとんどロームブロックは含まない  
若干の炭化粒子も見られる

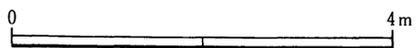


SI005

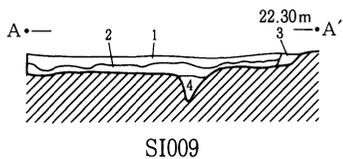
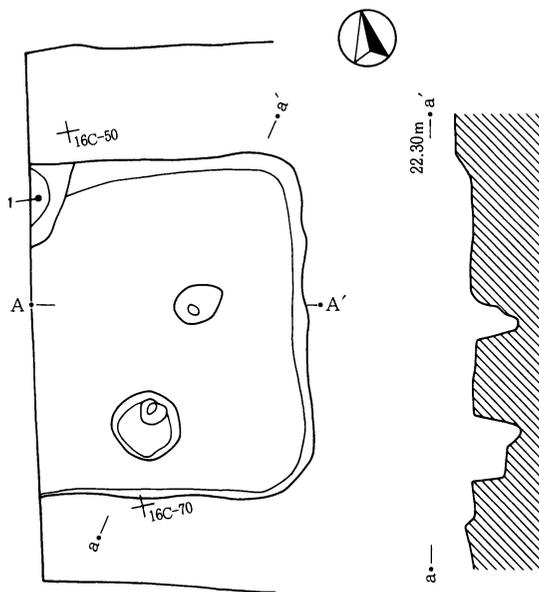


- 1 黒色土  
ボソボソしてしまりが無い
- 2 茶褐色土  
若干の焼土が混入している
- 3 焼土  
下部はかなり焼けている

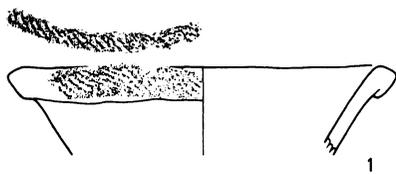
SI006



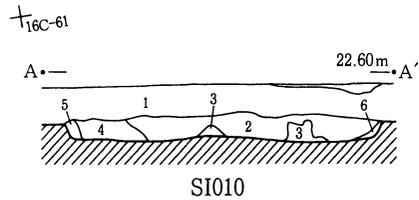
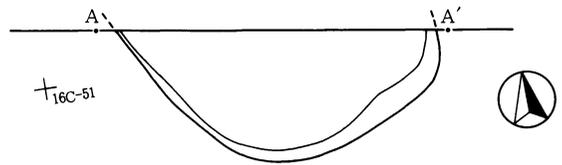
第7図 SI-005・006



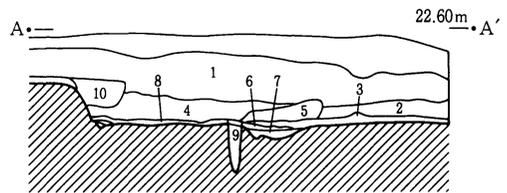
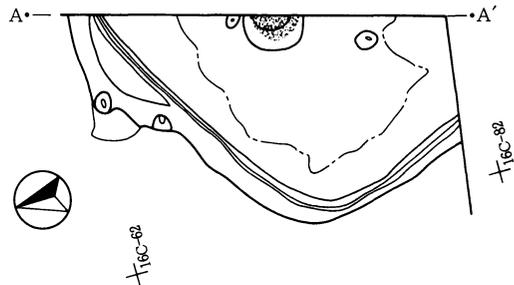
- 1 暗褐色土 ややしまりを有す。2~5mm大のローム粒を多く含み、炭化粒を少々含む
- 2 暗褐色土 ややしまりを有す。1より色調が暗くしまっている。下部にロームが多く混じる
- 3 褐色土 しまりを欠く。壁際の土、ロームが多く混じる
- 4 黒褐色土 しまりを欠き、粘性を有す。5mm大のローム粒を多く含む



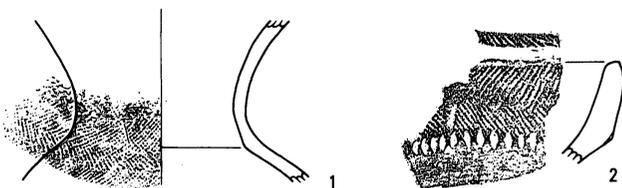
SI009出土遺物



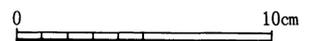
- 1 暗褐色土 しまりを有す。2mm大のローム粒を多く含む
- 2 暗褐色土 ややしまりを欠く。1cm大の形状のはっきりしないローム粒を多く含み、焼土粒を少々含む
- 3 暗褐色土 しまりを有す。5mm大のローム粒を多量に含む
- 4 暗褐色土 ややしまりを有す。ロームが多く混じる
- 5 黒褐色土 しまりを欠き、ローム粒を少量含む
- 6 褐色土 ややしまりを有す。ロームに暗褐色土が混じる



- 1 暗褐色土 しまりを有す。2~5mm大のローム粒を多量に含む。炭化粒も多く含む
- 2 暗褐色土 ややしまりを有す。2~5mm大のローム粒を多量に含む。1より色調が明るい。焼土粒を少々含む
- 3 暗褐色土 ややしまりを欠く。粘土粒を少量含む。2より色調がやや明るい
- 4 暗褐色土 ややしまりを有す。2mm~1cm大のローム粒を多く含む。1に比べ色調が暗い
- 5 黒褐色土 しまりを欠く。橙白色粘土を多量に含む。焼土粒も少量含む
- 6 暗褐色土 しまりを有し、焼土粒を少量含む
- 7 暗褐色土 しまりを有す。焼土からなり、堅固、暗褐色土が少々混じる
- 8 黒褐色土 しまりを有す。ローム粒を多く含む
- 9 暗褐色土 しまりを欠く。5mm大のローム粒を多く含む
- 10 暗褐色土 しまりを欠く。形状の不明確なロームブロック多く含む



SI011出土遺物



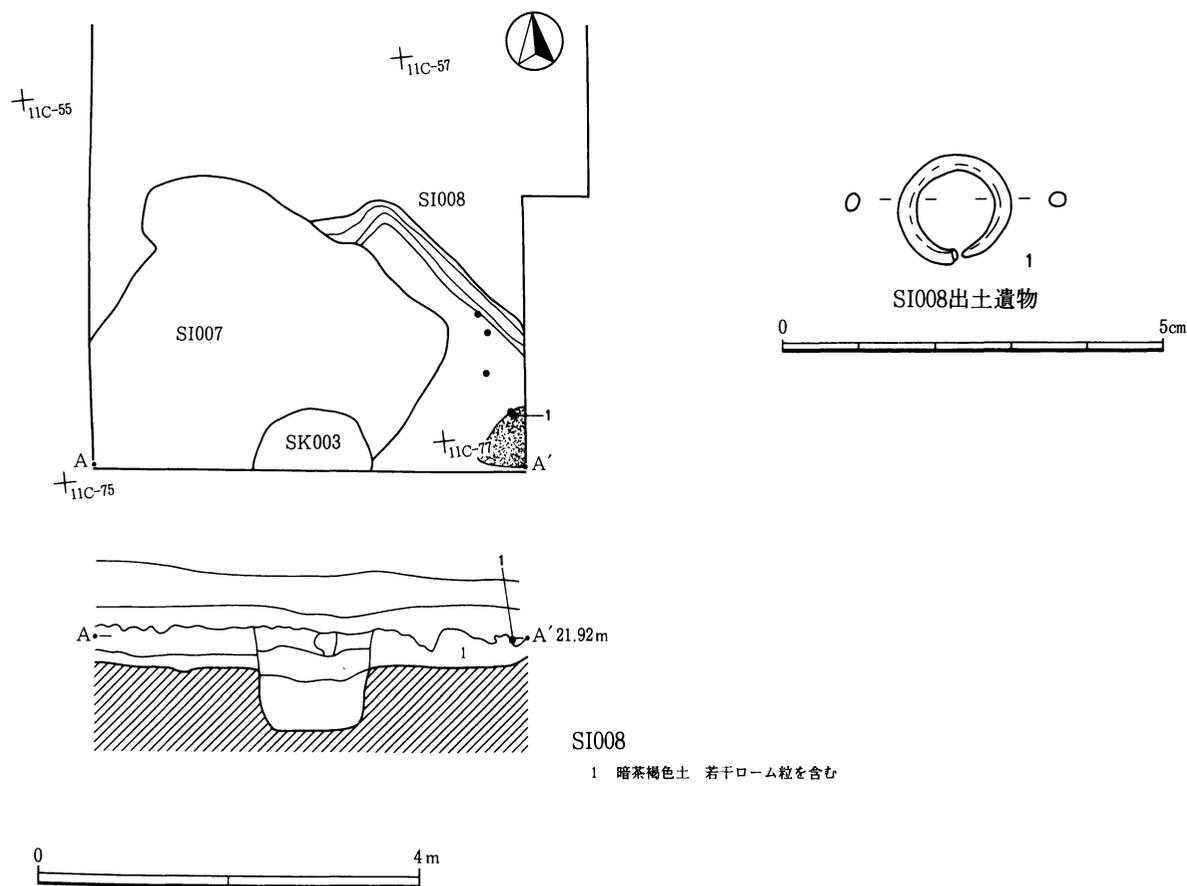
第8図 SI-009・010・011

SI-008 (011) (第9図)

平成5年度の1区から検出された。竪穴住居跡である。SI-010と切り合う、形状から住居跡と推定される。大きさは3.0m以上、深さ2.7cmである。時期は弥生時代後期と思われる。

出土した遺物は弥生土器20片、85.23g、土師器3片、70.5gが出土した。図化できる遺物はなかった。

1はリング状の銅製品である。直径は1.4cm、短径1.3cmである。針金状の銅線をリング状に加工している。覆土中からの出土である。



第9図 SI-008

SI-002 (002) (第10図, 図版2・7)

平成5年度の第3区から検出された。竪穴住居跡である。耕作による削平で形状は不明である。大きさは4.3m以上×1.2m以上である。出土遺物として緑釉陰刻花文輪花皿が出土している。出土例は少ない。時期は9世紀後半と思われる。

出土した遺物は弥生土器11片, 61.93g, 土師器108片, 642.3g, 須恵器9片, 216.62g, その他1点, 19.51gである。緑釉陰刻花文輪花皿1点が出土している。

1は杯形土器で1/2が残存している。実測番号は4である。遺物番号は13である。色調は外面は橙色で、内面は橙色である。口径は12.9cm, 底径は6.3cm, 器高は4.2cmである。外面の体部下位はヘラケズリを施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。奈良・平安時代に属する。

2は杯形土器で完形である。実測番号は1である。遺物番号は20である。色調は外面は明赤褐色で、内面は明赤褐色である。口径は13.4cm, 底径は5.4cm, 器高は4.1cmである。外面は底部周囲ヘラケズリを施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。奈良・平安時代に属する。

3は杯形土器で3/4が残存している。実測番号は3である。遺物番号は15である。色調は外面は橙色から黒色で、内面は橙色から黒色である。口径は13.0cm, 底径は5.5cm, 器高は3.9cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

4は杯形土器でほぼ完形である。実測番号は2である。遺物番号は19である。色調は外面は橙色で、内面は橙色である。口径は12.2cm, 底径は5.9cm, 器高は4.0cmである。底部回転糸切り, 底部周囲ヘラケズリを施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。奈良・平安時代に属する。

5は杯形土器で1/2が残存している。実測番号は5である。遺物番号は5である。色調は外面は橙色から鈍い褐色で、内面は橙色である。口径は13.0cm, 底径は6.5cm, 器高は3.9cmである。ロクロ成形である。胎土は緻密である。焼成は良好である。奈良・平安時代に属する。

6は緑釉陰刻花文輪花皿で約1/2が残存している。実測番号は6である。遺物番号は7である。外面には暗黄緑色の釉がある。口径は15.8cm, 底径は8.6cm, 器高は3.1cmである。口縁は若干波状を呈する。胎土は緻密である。焼成は良好である。詳細については第4章2でふれる。

7は平瓦の破片である。実測番号は7である。遺物番号は6である。外面は摩滅している。砂粒を多く含んでいる。

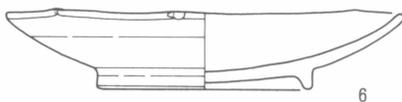
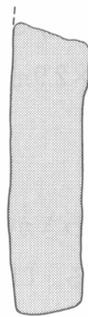
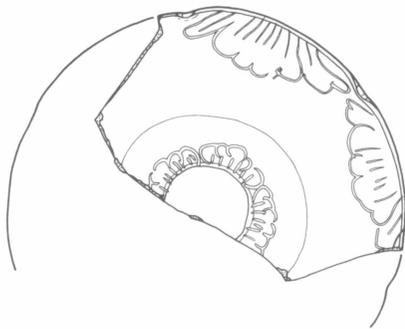
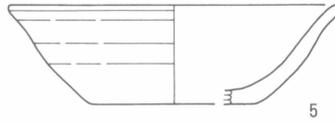
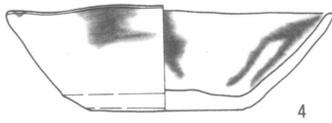
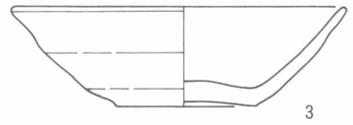
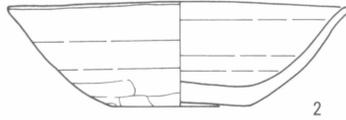
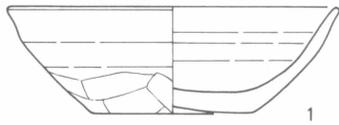
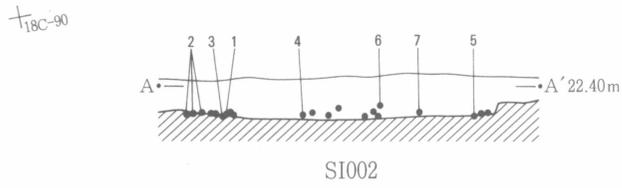
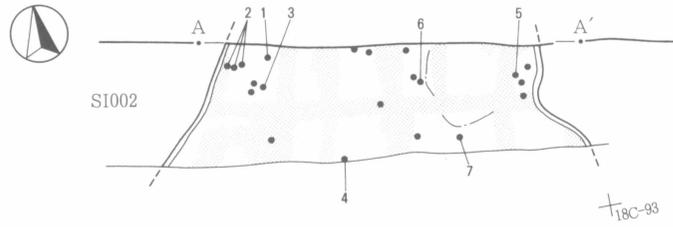
SI-003 (003) (第11図, 図版3・7)

平成5年度調査の第3区から検出された竪穴住居跡である。形状は方形を呈するが、南側は調査区外に続き、約1/4が残存する。大きさは3.55m×2.6m以上、深さは6.6cmである。カマドの煙道部が長い。時期は8世紀中頃と思われる。

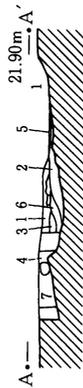
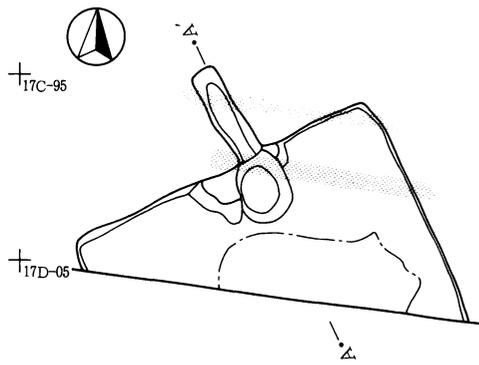
出土した遺物は土師器79片, 572.38gである。

1は杯形土器でほぼ完形である。実測番号は1である。遺物番号は8である。色調は外面は灰黄色で、内面は明赤褐色である。口径は13.5cm, 底径は8.7cm, 器高は3.9cmである。外面は摩滅している。胎土は緻密である。焼成は普通である。カマドからの出土である。奈良・平安時代に属する。

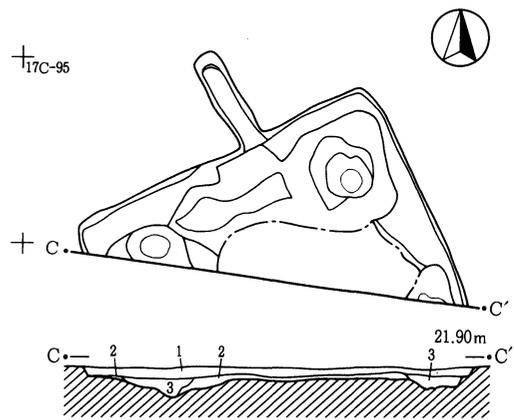
2は須恵器杯形土器の口縁部である。実測番号は2である。色調は外面は鈍い黄色で、内面は灰黄色である。口径は13.2cm, 器高は2.7cmである。



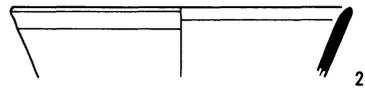
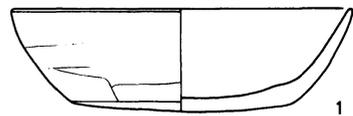
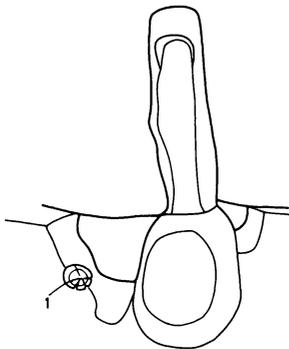
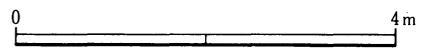
第10图 SI-002



- 1 暗茶褐色土 焼土粒子とごく微量の炭化物を含む
- 2 暗茶褐色土 + 白色粘土 + 焼土, 炭化粒
- 3 焼土 かなり焼けて, しまっている
- 4 暗茶褐色土 若干の白色粘土粒子と炭化物を含む
- 5 暗茶褐色土 ごく少量の炭化物のなか, ローム粒子を含む
- 6 炭化物集中層 若干のロームブロックと焼土粒子を含む
- 7 暗茶褐色土 + 炭化粒子 + 焼土粒子



- 1 茶褐色土 細かいローム粒子, ごく微量の焼土粒子と炭化粒子を含む
- 2 明褐色土 多量のロームブロックと白色粘土を含む。かなり硬くしまっている
- 3 暗褐色土とロームブロックの混土层



第11図 SI-003

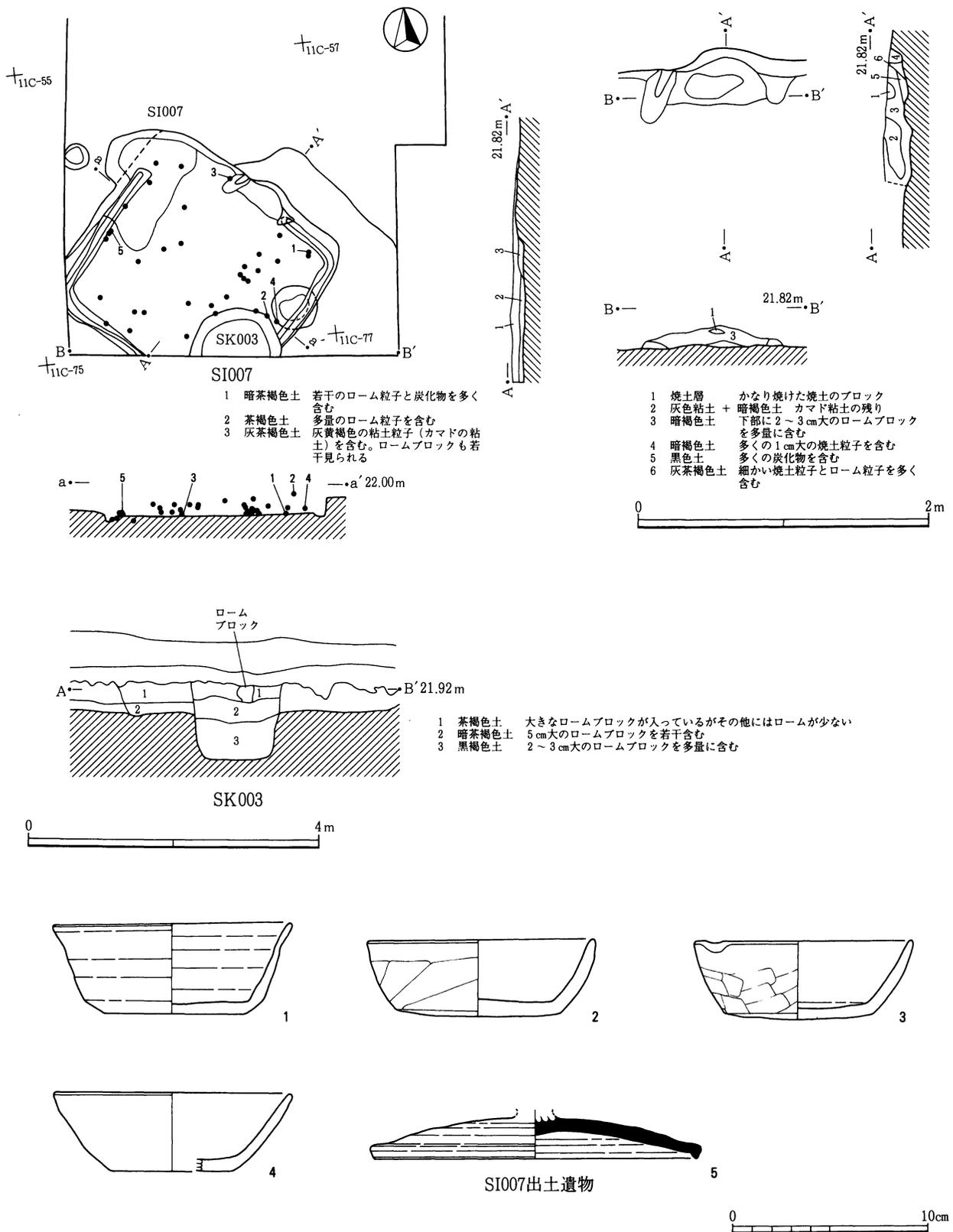
SI-007 (010) (第12図, 図版4・7・8)

平成5年度調査の第1区から検出された竪穴住居跡である。形状は方形を呈する。北東壁にカマドが作られている。周囲に壁溝が廻る。大きさは3.15m×2.9m, 深さ24.3cmである。時期は8世紀後半と思われる。

出土した遺物量は土師器60片, 714.37gである。

1は杯形土器ではほぼ完形である。カマドの左袖わきから出土した。実測番号は3である。遺物番号は4である。色調は外面は黒色で, 内面は黒褐色である。口径は12.1cm, 底径は7.2cm, 器高は4.7cmである。成形はロクロ成形, 底部周囲ヘラケズリを施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。8世紀後半に属する。

2は杯形土器で完形である。実測番号は1である。遺物番号は34である。色調は外面は橙色から黒褐色で, 内面は橙色から黒褐色である。口径は11.6cm, 底径は8.6cm, 器高は4.0cmである。外面はヨコナデ, ヘラケズリを施している。内面はヘラナデを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。8世紀後半に属する。



第12図 SI-007・SK-003

3は杯形土器で完形である。実測番号は2である。遺物番号は2である。色調は外面は赤褐色から黒褐色で、内面は明赤褐色である。口径は11.1cm、底径は7.7cm、器高は4.1cmである。外面は底部ヘラ切りである。内面はヨコナデを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。9世紀後半に属する。

4は杯形土器で底部中央を欠損する。実測番号は5である。遺物番号は36である。色調は外面は赤褐色から黒褐色で、内面は赤褐色である。口径は12.0cm、底径は6.1cm、器高は4.0cmである。外面はヘラケズリを施している。胎土は長石粒を含む。焼成は良好である。9世紀後半に属する。

5は須恵器の蓋で1/2が残存している。実測番号は4である。遺物番号は32である。色調は内外面ともにオリーブ黒から黄褐色である。口径は16.6cm、残存器高は2.1cmである。焼成は緻密である。9世紀後半に属する。

#### SI-012 (SI-001) (第13図, 図版6・8)

平成13年度調査のA区から検出された。竪穴住居跡である。大きさ・形状は不明である。時期は8世紀後半から9世紀初頭と思われる。

出土した遺物は土師器226片, 1535g, 須恵器59片, 751.74g, 瓦7片, 186.01gであった。

1は杯形土器でほぼ完形である。実測番号は1である。遺物番号は30である。色調は外面は明赤褐色で、内面は橙色である。口径は12.3cm、底径は8.4cm、器高は4.1cmである。外面はヘラケズリを施している。内面はミガキを施している。焼成は良好である。

2は杯形土器である。実測番号は2である。遺物番号は11である。色調は外面は橙色で、内面は橙色である。口径は12.0cm、底径は7.8cm、器高は3.6cmである。胎土は赤茶色粒を含む。焼成は良好である。8世紀に属する。

3は須恵器杯形土器で完形である。実測番号は4である。遺物番号は29である。色調は外面は灰色で、内面は灰色である。口径は13.0cm、底径は9.2cm、器高は3.7cmである。焼成は普通である。8世紀に属する。

4は高台付杯形土器である。実測番号は5である。遺物番号は9である。色調は外面は灰色で、内面は灰色である。底径は9.4cm、残存器高は2.2cmである。焼成は良好である。8世紀に属する。

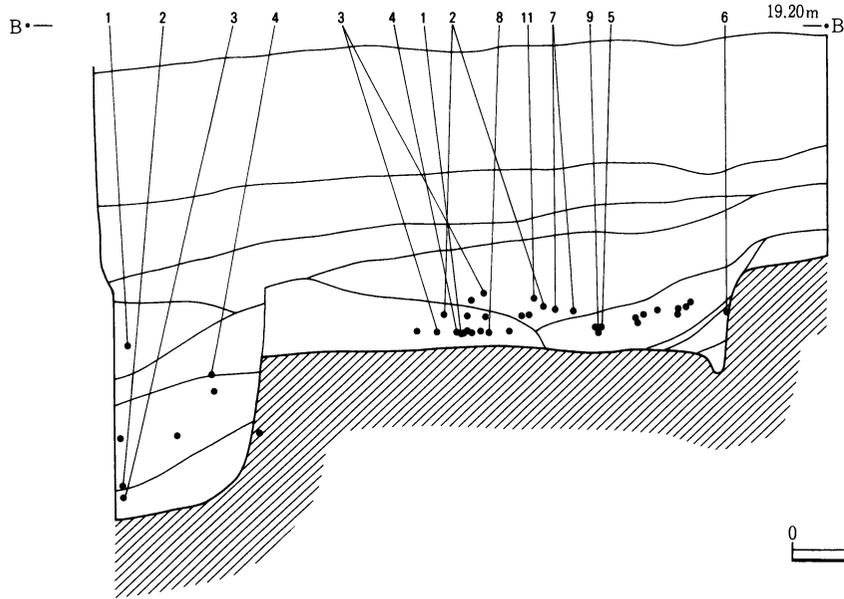
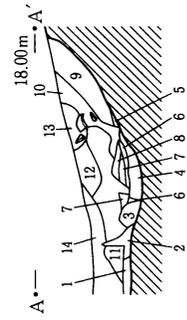
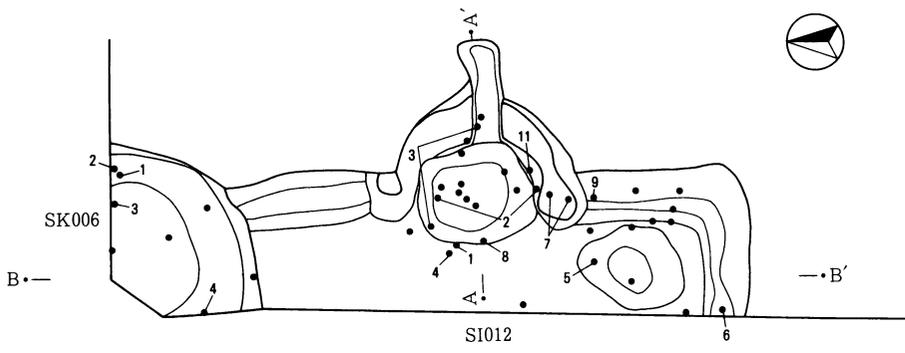
5は蓋形土器で1/4が残存する。実測番号は9である。遺物番号は20である。色調は外面は灰色で、内面は灰色である。口径は14.0cm、器高は2.0cmである。胎土は緻密である。焼成は良好である。8世紀に属する。

6は蓋形土器で1/4が残存する。実測番号は8である。遺物番号は31である。色調は内外面ともに灰色である。口径は16.0cm、器高は1.9cmである。胎土は緻密である。焼成は良好である。8世紀に属する。

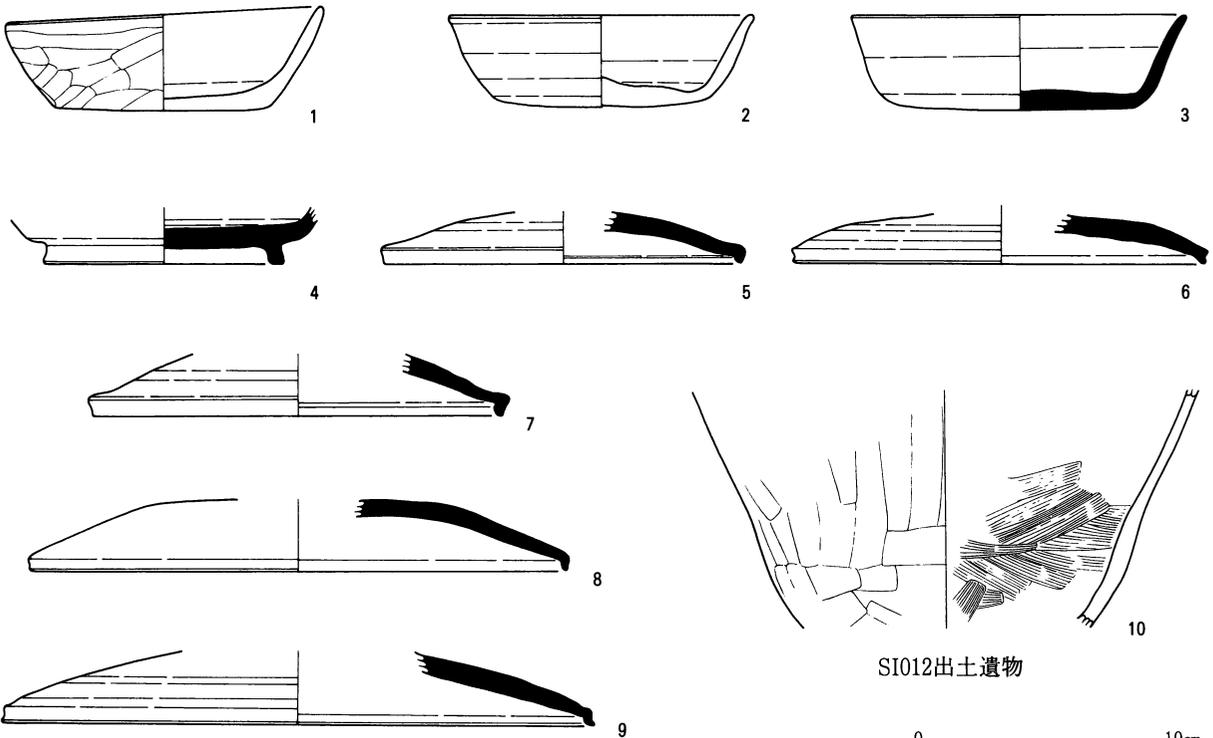
7は蓋形土器で1/5が残存する。実測番号は10である。遺物番号は1である。色調は内外面ともに灰色である。口径は16.0cm、残存器高は2.4cmである。胎土は緻密である。焼成は良好である。8世紀に属する。

8は蓋形土器で1/3が残存する。実測番号は6である。遺物番号は34である。色調は内外面ともに灰色である。口径は21.0cm、残存器高は2.7cmである。胎土は緻密である。焼成は良好である。8世紀に属する。

9は蓋形土器で1/4が残存する。実測番号は7である。遺物番号は14である。色調は内外面ともに灰色



- 1 暗褐色土 ローム粒子, 焼土粒子を少量混入
- 2 暗褐色土 ローム粒子を多く含み明るい。しまり強い
- 3 暗褐色土 ローム粒子, ローム粒を少量混入
- 4 暗褐色土 ローム粒子, 焼土粒子, 焼土粒を少量混入
- 5 灰白色土 山砂を多く含む
- 6 黒褐色土 炭を主体とし焼土粒子を少量含む
- 7 赤褐色土 炭を主体としローム粒子, 焼土粒子を少量含む
- 8 赤褐色土 焼けたローム粒子を主体とし, しまりは弱くもろい
- 9 暗褐色土 ローム粒子, 山砂粒子, 炭を混入
- 10 暗褐色土 ローム粒子, ローム粒, 焼土ブロックを混入
- 11 暗褐色土 山砂が粒状に少量混入。炭化粒を少量含む
- 12 暗褐色土 11層より少なく山砂が粒ブロック状に混入
- 13 暗褐色土 山砂をやや多く含み全体的にやや白色系を感じる
- 14 暗褐色土 焼土粒, 炭化粒を少量混入



SI012出土遺物

第13図 SI-012・SK-006

である。口径は23.1cm，残存器高は2.8cmである。焼成は良好である。奈良・平安時代に属する。

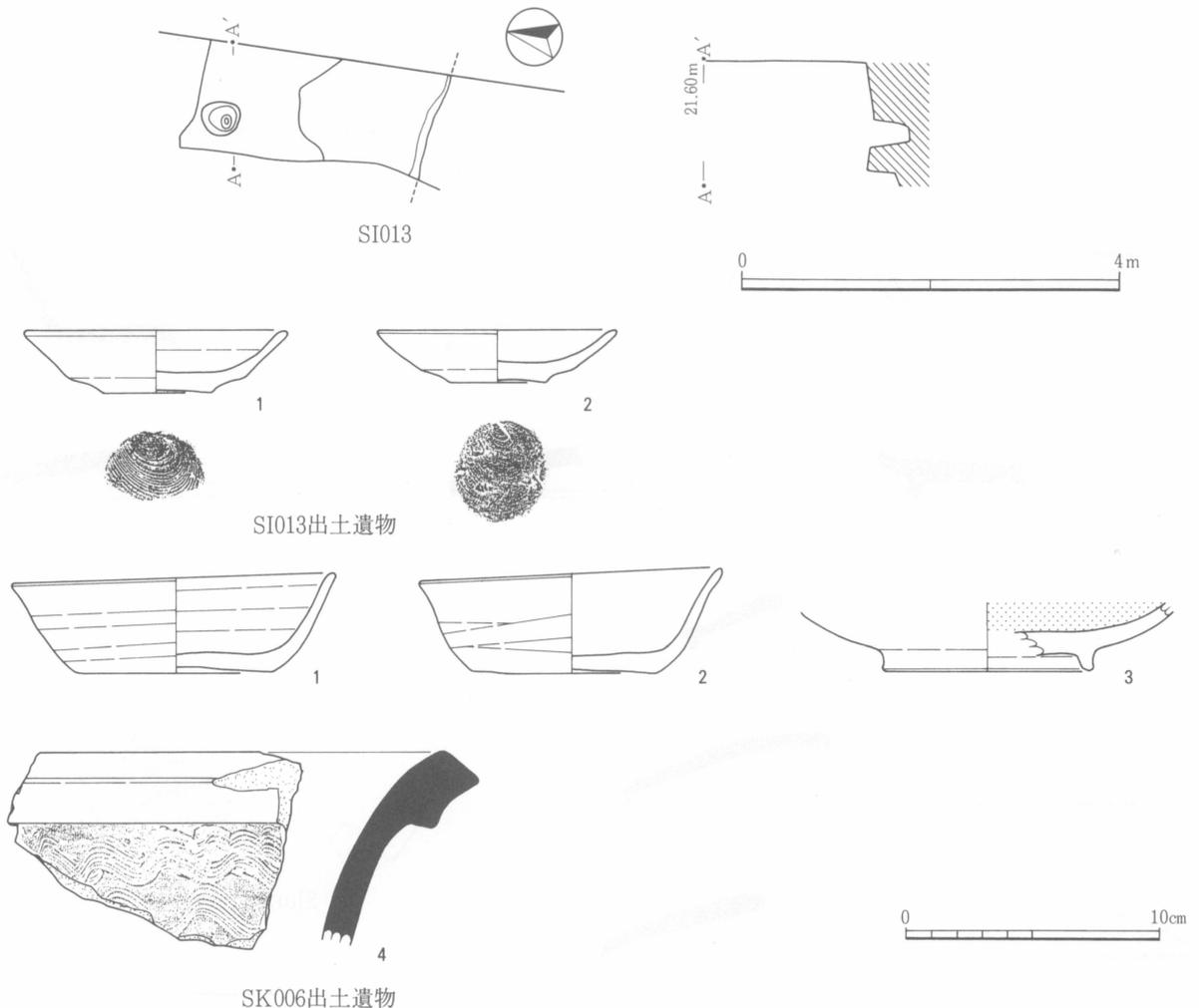
10は甕形土器で胴以下を欠損する。実測番号は3である。遺物番号は1である。色調は外面は黒褐色であり，内面は赤褐色である。口径は19.8cm，器高は9.2cmである。外面はヘラケズリを施している。内面はハケナデを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は普通である。奈良・平安時代に属する。

SI-013 (SI-002) (第14図，図版6・8)

平成13年度調査のA区から検出された竪穴住居跡である。大きさ・形状は不明である。時期は奈良・平安時代と思われる。出土した遺物は土師器1316片，5184.55g，須恵器153片，819.79g，陶器6片，49.4gである。陶器には緑釉陶器が2点出土している。

1は杯形土器で1/4が残存する。実測番号は1である。遺物番号は3である。色調は外面は鈍い黄橙色で，内面は鈍い橙色である。口径は10.2cm，底径は4.2cm，器高は2.4cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。奈良・平安時代に属する。

2は杯形土器で1/3が残存する。実測番号は2である。遺物番号は1である。色調は外面は橙色で，内面は橙色である。口径は9.4cm，底径は3.8cm，器高は2.0cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。須恵器で奈良・平安時代に属する。



第14図 SI-013・SK-006

(2) 土坑・井戸状遺構

SK-001 (006) (第15図, 図版3)

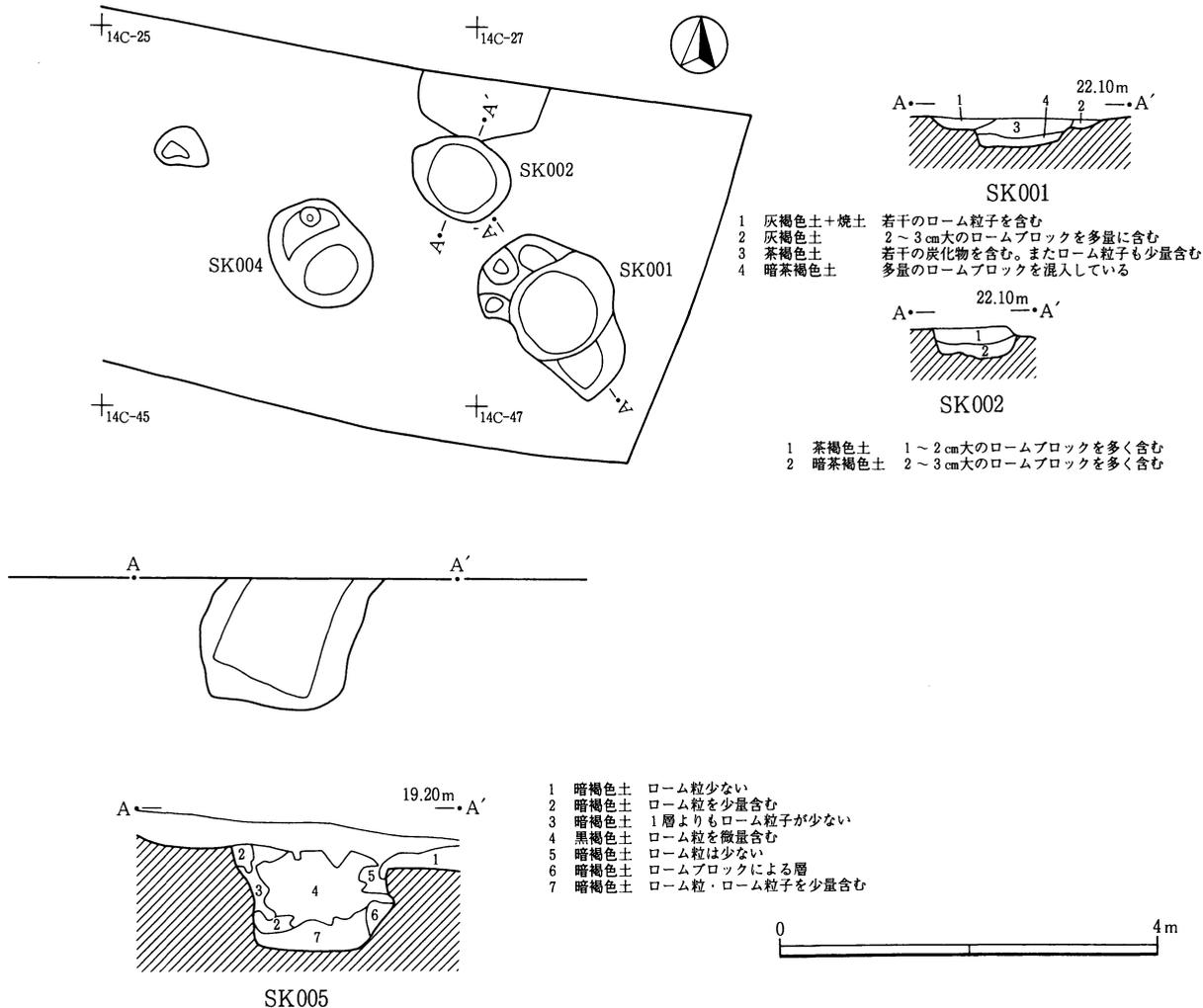
平成5年度調査の第2区から検出された土坑である。他の土坑と重複している。底面は平らである。大きさは1.2m×1.0m, 深さは29.3cmである。出土遺物は弥生土器7片, 49.09g, 土師器5片, 12.53g, その他瓦1点, 18.48gである。

SK-002 (007) (第19図, 図版4)

平成5年度調査の第2区から検出された土坑である。他の土坑と重複している。底面には凹凸がある。大きさは1.1m×0.85m, 深さ30.5cmである。出土した遺物は土師器3片, 10.59g, 陶器1片, 2.98g, その他カワラケ1点, 11.93gである。

SK-003 (009) (第12図)

平成5年度調査の第1区から検出された。井戸状遺構で形状は円形を呈す。SI-010, SI-011と重複し, もっとも新しい。土層は3層に分けられ, 各層の間はほぼ水平堆積をしている, 南側は調査区外に続く。大きさは1.25m×0.61m以上, 深さ0.651mである。時期は奈良・平安時代と思われる。出土遺物は弥生土器11片, 67.74g, 土師器17片, 189.93g, 須恵器1片, 7.17gである。



第15図 SK-001・002・004・005

SK-004 (013) (第15図)

平成5年度調査の第2区から検出された土坑である。大きさは1.2m×0.8m、深さ20.4cmである。性格は不明である。出土遺物は1片で3.47gである。

SK-005 (SK-001) (第4・15図, 図版6)

平成13年度調査のA区から検出された土坑である。ほぼ1/2を調査した。大きさは1.6m以上×1.4m、深さ45.3cmである。時期は奈良・平安時代に属する。性格は不明である。

SK-006 (SK-002) (第13・14図, 図版12)

平成13年度調査のA区から検出された土坑である。大きさは不明であるが、深さは21.8cmを計る。

出土した遺物は弥生土器1片, 6.54g, 土師器134片, 786.79g, 須恵器32片, 271.32gがある。時期は10世紀前半と思われる。性格は不明である。

1は杯形土器で完形である。実測番号は1である。遺物番号は4である。色調は外面は橙色であり、内面は橙色である。口径は12.6cm, 底径は7.8cm, 器高は3.9cmである。底部回転糸切りである。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。奈良・平安時代に属する。

2は杯形土器で3/4が残存する。実測番号は2である。遺物番号は7である。色調は外面は橙色であり、内面は橙色である。口径は12.0cm, 底径は7.4cm, 器高は4.1cmである。底部回転糸切りで、底部周囲ヘラケズリを施している。焼成は良好である。奈良・平安時代に属する。

3は高台杯形土器で1/4が残存する。実測番号は3である。遺物番号は8である。色調は外面は鈍い黄褐色であり、内面は黒色である。底径は8.4cm, 残存器高は2.7cmである。内面は格子状のミガキを施している。胎土は良好である。焼成は良好である。10世紀前半と思われる。

4は須恵器甕形土器の口縁部片である。実測番号は4である。遺物番号は9である。色調は内外面ともに灰色である。外面に波状文を施している。焼成は良好である。奈良・平安時代に属する。

### (3) 溝状遺構

SD-001 (第16~19図, 図版5・6・8~10)

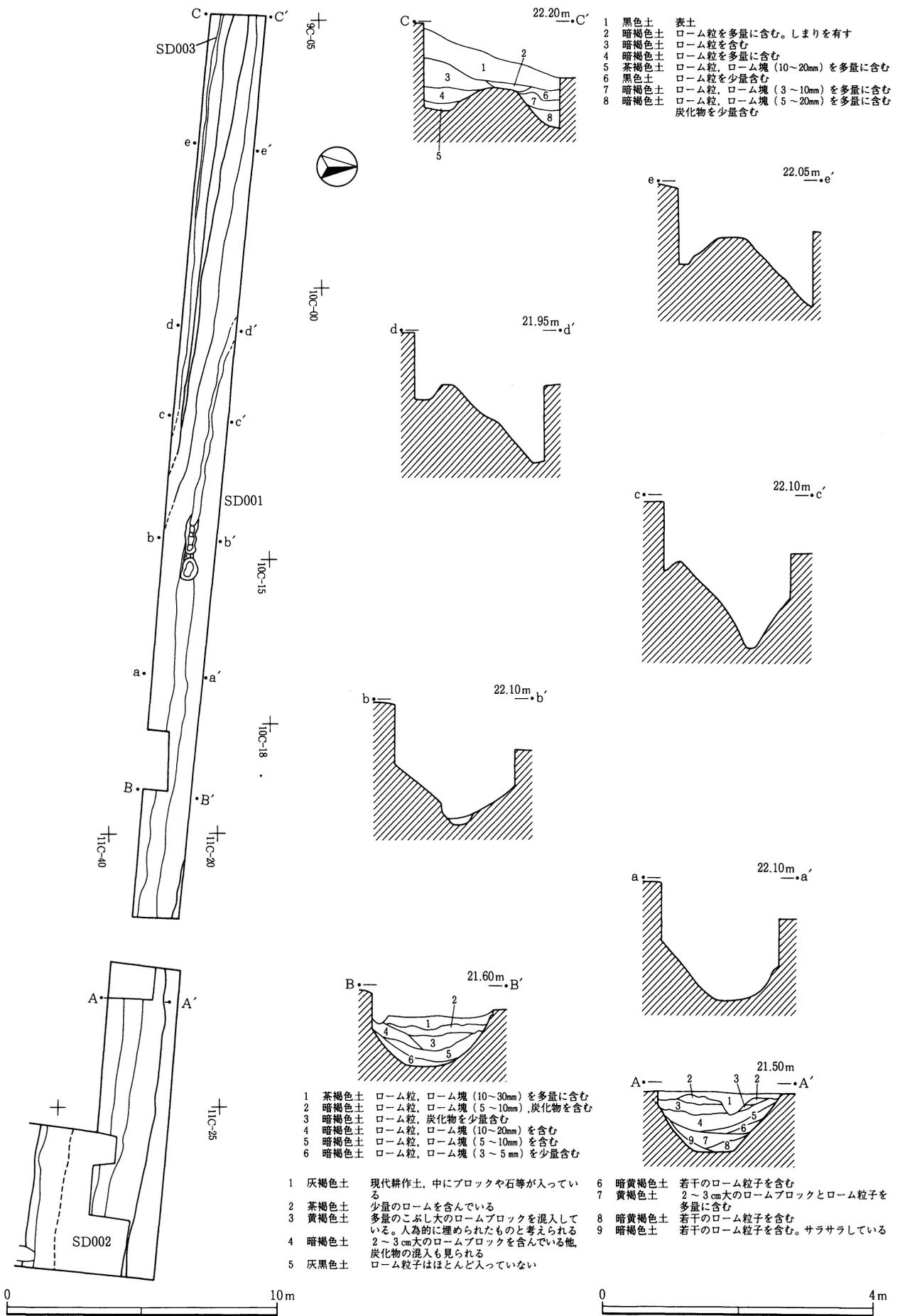
012, 012A, 018は同一の遺構と推定されるので、SD-001として一括した。

012は第1地点から検出された溝跡である。平成5年度調査をした012の延長部と思われる。019とほぼ同一方向に向いている。調査担当者は溝底にピットがあり柵列と推定しているが、他遺跡の例などから溝または道路跡と思われる。

012Aは第1区から検出された。溝跡である。012Aが古く012B (SD-002) が新しい。深さは1.03mである。時期は11世紀前半頃と思われる。出土した遺物は弥生土器33片, 397.38g, 土師器122片, 1014.74g, 須恵器41片, 766.34g, 陶器4片, 228.85g, カワラケ底部176片, 2732.49g, カワラケ口縁47片, 228.44g, カワラケ体部90片, 484.01g, 瓦5点, 781.37g, その他2片, 90.1gである。

018は溝跡で012の続きと推定されるが、別番号を付けた。かろうじて南側の壁が確認できた。出土した遺物は土師器2片, 15.69g, 陶器1片, 18.21g, カワラケ6片, 95.1gであった。

1はカワラケである。実測番号は11である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに橙色である。口



第16図 SD-001・002・003

径は14.2cm, 底径は7.2cm, 器高は4.1cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

2はカワラケで約1/2が残存する。実測番号は14である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに明黄褐色である。口径は14.1cm, 底径は6.3cm, 器高は4.6cmである。底部回転糸切りである。底部は若干上げ底をしている。胎土は緻密である。焼成は良好である。

3はカワラケで完形である。実測番号は34である。遺物番号は14である。色調は内外面ともに鈍い黄褐色である。口径は13.8cm, 底径は6.0cm, 器高は4.6cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

4はカワラケで完形である。実測番号は35である。遺物番号は17である。色調は内外面ともに黄褐色である。口径は14.2cm, 底径は6.0cm, 器高は4.1cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

5はカワラケで底部を欠損し, 約1/4が残存する。実測番号は19である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに橙色である。口径は15.7cm, 器高は4.0cmである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

6は杯形土器の破片である。実測番号は23である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに鈍い黄褐色から褐色である。口径は12.0cm, 底径は5.6cm, 器高は4.6cmである。胎土は緻密である。焼成は良好である。線刻がある。

7は杯形土器で体部以上を欠損し, 底部を約1/2が残存する。実測番号は17である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに橙色である。底径は6.6cm, 残存器高は2.5cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

8は杯形土器で底部を約1/2が残存する。実測番号は10である。遺物番号は1である。色調は外面は橙色で, 内面は橙色から明赤褐色である。底径は8.0cm, 残存器高は2.1cmである。底部回転糸切りである。焼成は良好である。

9は杯形土器の底部片である。実測番号は31である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに鈍い黄褐色である。底径は6.4cm, 器高は1.9cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

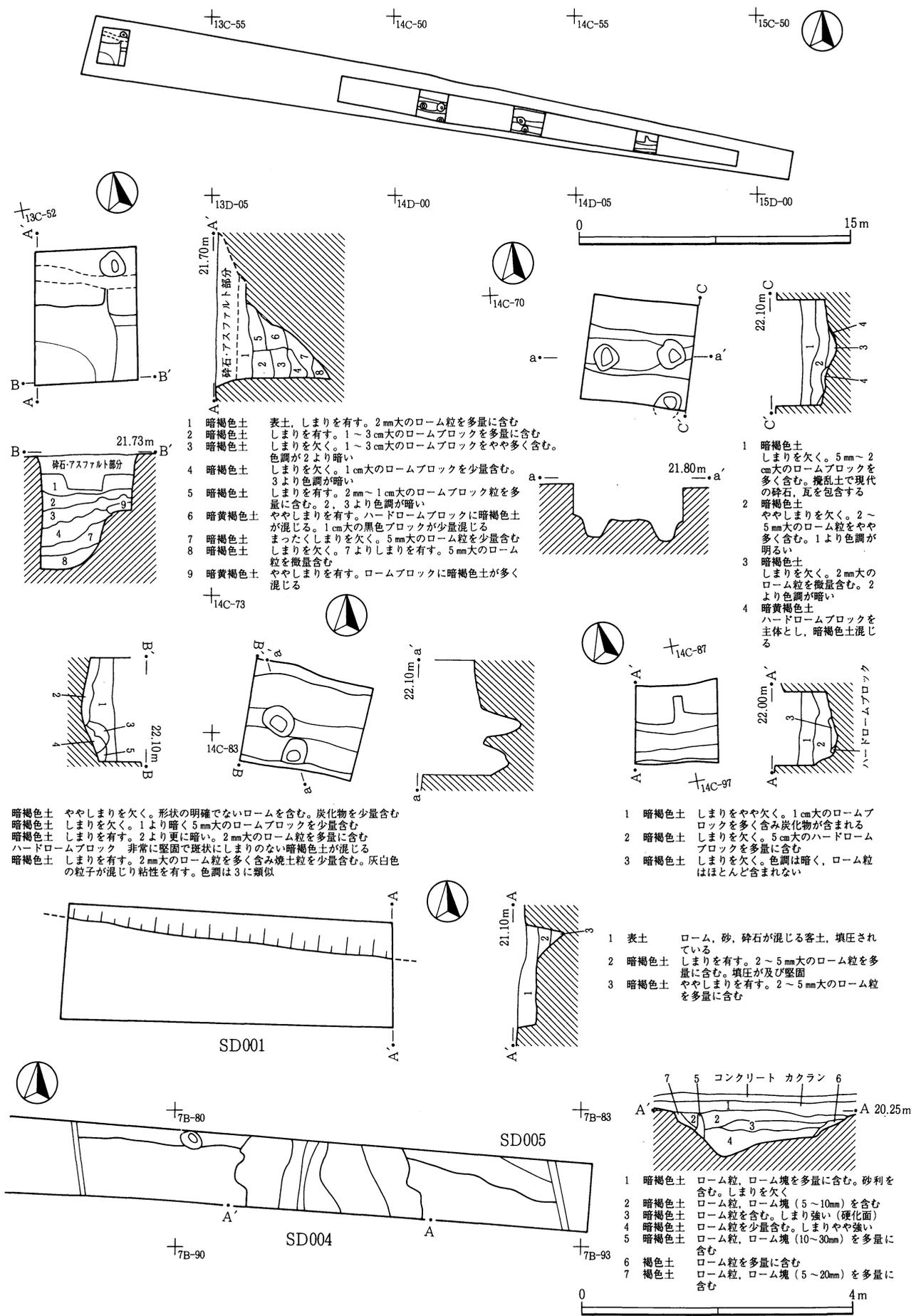
10はカワラケでほぼ完形である。実測番号は1である。遺物番号は1である。色調は内外面ともに橙色である。口径は8.0cm, 底径は5.3cm, 器高は1.8cmである。底部回転糸切りである。

11はカワラケでほぼ完形である。実測番号は2である。遺物番号は15である。色調は外面は鈍い黄褐色で, 内面は鈍い褐色である。口径は8.6cm, 底径は5.3cm, 器高は1.9cmである。底部回転糸切りである。焼成は良好である。

12はカワラケでほぼ完形である。実測番号は3である。遺物番号は13である。色調は内外面ともに鈍い黄褐色から黒褐色である。口径は8.7cm, 底径は4.7cm, 器高は1.8cmである。底部回転糸切りである。焼成は良好である。

13はカワラケでほぼ完形である。実測番号は4である。遺物番号は5である。色調は外面は褐色で, 内面は褐色から明赤褐色である。口径は8.4cm, 底径は5.9cm, 器高は2.2cmである。底部回転糸切りである。焼成は良好である。

14はカワラケで口唇部を欠損する。実測番号は5である。遺物番号は1である。色調は内外面ともに鈍



- 1 暗褐色土 表土。しまりを有す。2mm大のローム粒を多量に含む
- 2 暗褐色土 しまりを有す。1~3cm大のロームブロックを多量に含む
- 3 暗褐色土 しまりを欠く。1~3cm大のロームブロックをやや多く含む。色調が2より暗い
- 4 暗褐色土 しまりを欠く。1cm大のロームブロックを少量含む。3より色調が暗い
- 5 暗褐色土 しまりを有す。2mm~1cm大のロームブロック粒を多量に含む。2, 3より色調が暗い
- 6 暗黄褐色土 ややしみを有す。ハードロームブロックに暗褐色土が混じる。1cm大の黒色ブロックが少量混じる
- 7 暗褐色土 まったくしまりを欠く。5mm大のローム粒を少量含む
- 8 暗褐色土 しまりを欠く。7よりしまりを有す。5mm大のローム粒を微量含む
- 9 暗黄褐色土 ややしみを有す。ロームブロックに暗褐色土が多く混じる

- 1 暗褐色土 しまりを欠く。5mm~2cm大のロームブロックを多く含む。換土で現代の砕石、瓦を包含する
- 2 暗褐色土 ややしみを欠く。2~5mm大のローム粒をやや多く含む。1より色調が明るい
- 3 暗褐色土 しまりを欠く。2mm大のローム粒を微量含む。2より色調が暗い
- 4 暗黄褐色土 ハードロームブロックを主体とし、暗褐色土混じる

- 1 暗褐色土 しまりをやや欠く。1cm大のロームブロックを多く含む炭化物が含まれる
- 2 暗褐色土 しまりを欠く。5cm大のハードロームブロックを多量に含む
- 3 暗褐色土 しまりを欠く。色調は暗く、ローム粒はほとんど含まれない

- 1 表土 ローム、砂、砕石が混じる客土、填圧されている
- 2 暗褐色土 しまりを有す。2~5mm大のローム粒を多量に含む。填圧が及び堅固
- 3 暗褐色土 ややしみを有す。2~5mm大のローム粒を多量に含む

- 1 暗褐色土 ローム粒、ローム塊を多量に含む。砂利を含む。しまりを欠く
- 2 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(5~10mm)を含む
- 3 暗褐色土 ローム粒を含む。しまり強い(硬化面)
- 4 暗褐色土 ローム粒を少量含む。しまりやや強い
- 5 暗褐色土 ローム粒、ローム塊(10~30mm)を多量に含む
- 6 褐色土 ローム粒を多量に含む
- 7 褐色土 ローム粒、ローム塊(5~20mm)を多量に含む

第17図 SD-001・004・005

い褐色である。口径は7.6cm, 底径は5.4cm, 器高は2.2cmである。底部回転糸切りである。焼成は良好である。

15はカワラケでほぼ完形である。実測番号は12である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに鈍い黄橙色である。口径は7.4cm, 底径は4.7cm, 器高は1.6cmである。底部回転糸切りである。焼成は良好である。

16はカワラケでほぼ完形である。実測番号は13である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに橙色である。口径は8.3cm, 底径は4.8cm, 器高は1.5cmである。底部回転糸切りである。焼成は良好である。

17はカワラケでほぼ完形である。実測番号は18である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに橙色である。口径は8.3cm, 底径は5.3cm, 器高は1.9cmである。焼成は良好である。

18はカワラケで3/4が残存する。実測番号は16である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに橙色である。口径は8.6cm, 底径は5.0cm, 器高は1.6cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

19は杯形土器で1/2が残存する。実測番号は15である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに鈍い黄褐色から黒褐色である。口径は8.1cm, 底径は5.0cm, 器高は1.7cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

20はカワラケで底部を約1/4欠損する。実測番号は21である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに明赤褐色である。口径は8.1cm, 底径は5.2cm, 器高は2.1cmである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

21はカワラケの底部片で約1/3が残存する。実測番号は20である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに橙色である。口径は9.0cm, 底径は5.8cm, 器高は1.9cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

22はカワラケの底部片で1/4が残存する。実測番号は22である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに橙色である。口径は9.5cm, 底径は5.5cm, 器高は2.0cmである。胎土は緻密である。焼成は良好である。12世紀に属する。

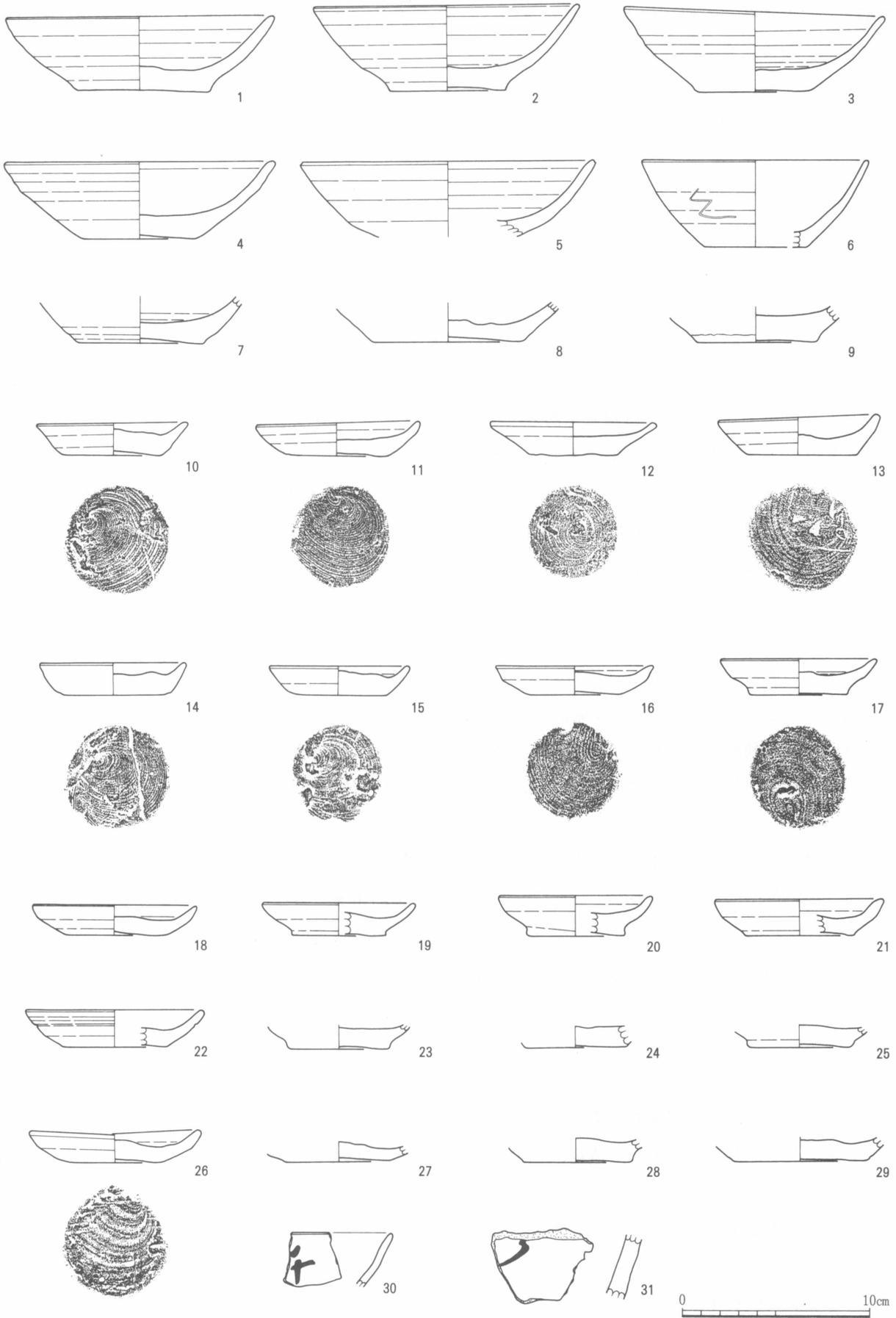
23はカワラケの底部片である。実測番号は7である。遺物番号は6である。色調は内外面ともに鈍い黄橙色である。底径は5.4cm, 残存器高は1.3cmである。底部回転糸切りである。胎土は良好である。焼成は良好である。

24はカワラケの底部片である。実測番号は8である。遺物番号は5である。色調は外面は橙色で、内面は橙色から褐灰色である。底径は5.4cm, 残存器高は1.1cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

25はカワラケの底部片である。実測番号は9である。遺物番号は4である。色調は外面は橙色で、内面は橙色である。底径は5.5cm, 残存器高は1.2cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

26はカワラケで完形である。実測番号は33である。遺物番号は16である。色調は内外面ともに橙色である。口径は9.1cm, 底径は5.0cm, 器高は1.7cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

27は杯形土器の底部片である。実測番号は29である。遺物番号は18である。色調は外面は鈍い黄褐色で、



第18图 SD-001·002

内面は鈍い黄橙色から橙色である。底径は5.5cm，器高は1.1cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

28は杯形土器の底部片である。実測番号は30である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに橙色である。底径は5.7cm，残存器高は1.2cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

29は杯形土器で3/4が残存する。実測番号は32である。遺物番号は18である。色調は外面は鈍い赤褐色から暗赤灰色で，内面は橙色である。底径は7.2cm，器高は1.2cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

30は杯形土器の口縁部片である。実測番号は24である。遺物番号は18である。色調は外面は橙色で，内面は橙色である。胎土は緻密である。焼成は良好である。墨書がある。

31は甕形土器の胴部片である。実測番号は25である。遺物番号は18である。色調は外面は明赤褐色で，内面は明赤褐色である。胎土は緻密である。焼成は良好である。墨書がある。

32は平瓦である。実測番号は37である。遺物番号は92である。色調は内外面ともに灰白色である。外面は格子模様があり，11から12本/1cmを施している。胎土は砂粒を含むが良好である。焼成は良好である。

33は染付の小皿で1/4が残存する。実測番号は6である。遺物番号は10である。口径は10.6cm，底径は7.2cm，器高は2.6cmである。焼成は良好である。

34は土錘でほぼ完形である。実測番号は27である。遺物番号は18である。長さ4.9cm，径2.2cmである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

35は土錘である。長軸に対して片方の1/2を欠損する。実測番号は28である。遺物番号は18である。長さ4.7cm，短径2.1cmである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

36は底部片を利用した紡錘車である。実測番号は26である。遺物番号は18である。色調は内外面ともに鈍い橙色である。長径4.0cm，短径3.8cmである。中央に焼成後の孔1個がある。胎土は緻密である。焼成は良好である。

37は高台付杯の底部を利用した土製品である。実測番号は36である。遺物番号は5である。色調は内外面ともに鈍い黄橙色である。長径4.7cm，短径4.3cm，器高は1.6cmである。用途は不明だが，底部外面側から穿孔され，孔の中は磨滅している。胎土は緻密である。焼成は良好である。

38は杯形土器で体部を欠損する。底径は5.2cm，残存高は1.2cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

#### SD-002 (012B) (第18・19図，図版6)

平成5年度と平成6年度調査の第1区から検出された溝跡である。調査区が狭いため上端のみ確認された。下端は不明である。出土した遺物は弥生土器45片，603.14g，土師器2064片，8757.43g，須恵器120片，1717.45g，陶器41片，1083.52g，カワラケ底部706片，10765.33g，カワラケ口縁部608片，1486.17g，カワラケ体部265片，1170.97g，礫51点，炉壁材5点，瓦8点，590.16gである。

#### SD-003 (019) (第16図)

平成9年度調査の第1地点から検出された溝跡である。012・019とは同一方向に向いており，性

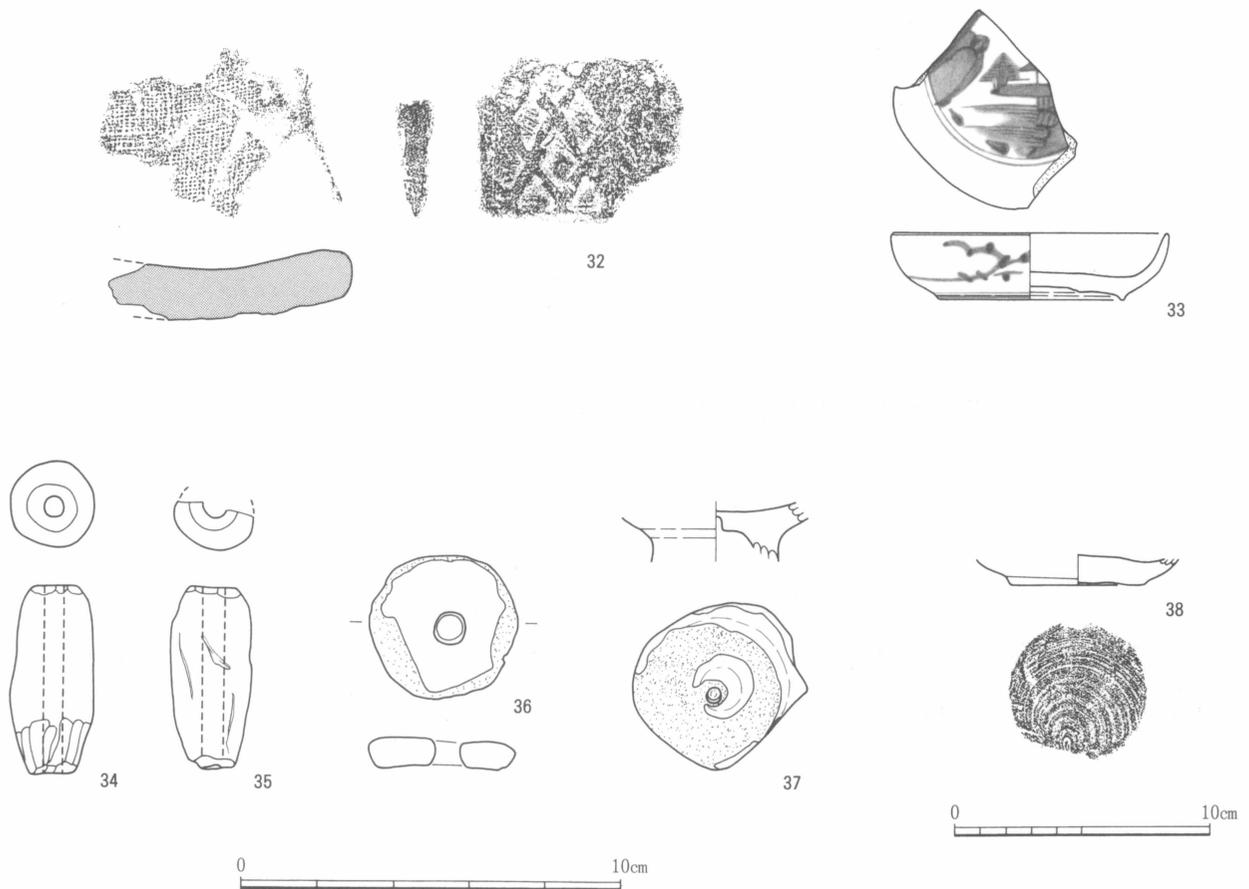
格が同じ溝と推定される。

SD-004 (020) (第17図)

平成9年度調査の第2地点から検出された溝跡である。021を020が切ることから020が新しい。調査できた長さは7.15m以上である。覆土から出土した遺物に中世まで下がる遺物はない。そのため、古代の溝と推定される。時期は奈良・平安時代に属すると思われる。出土した遺物は土師器23片、85.19g、須恵器1片、30.91g、カワラケ2片、16.35g、その他2片であった。

SD-005 (021) (第17図)

平成9年度調査の第2地点から検出された溝跡である。調査できた長さは7.15m以上である。覆土から出土した遺物に中世まで下がる遺物はない。そのため、020と同様に古代の溝と推定できる。時期は奈良・平安時代と思われる。出土した遺物は須恵器1片、14.2g、カワラケ5片、31.19gであった。

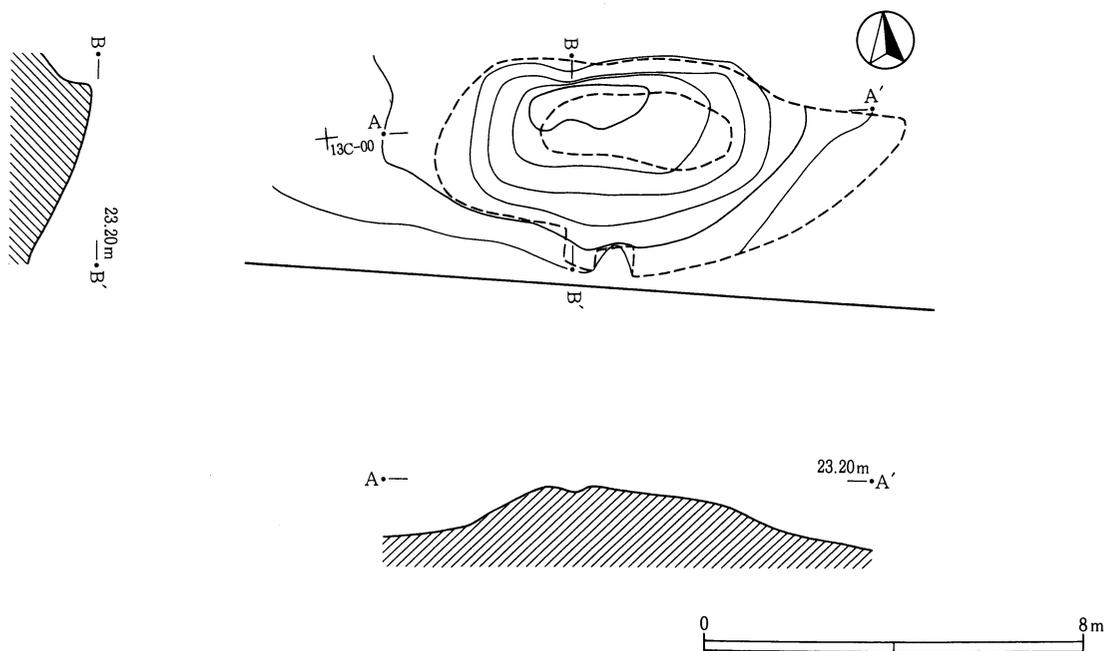


第19図 SD-001・002

#### (4) 塚

SM-001 (014) (第20図, 図版4)

平成6年度調査の道路反対側で調査された。当初は塚として調査を実施した。墳丘測量を実施したが、明確に塚としての根拠は見いだせないことから土層断面等は作成しなかった。調査記録によると盛土にしまりはなく、塚の可能性も捨てきれないが、現段階ではたんなる盛土の可能性が高い。出土遺物はない。構築時期は不明である。



第20図 SM-001 (塚)

### 第2節 平成13年度A区から出土した遺物 (第21~23図, 図版10・11)

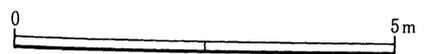
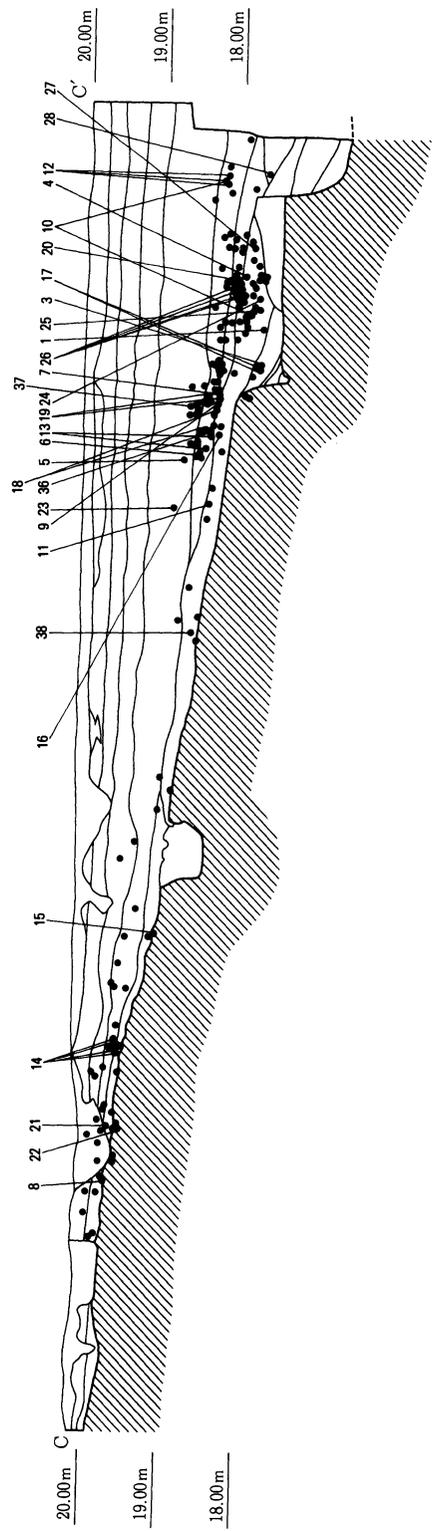
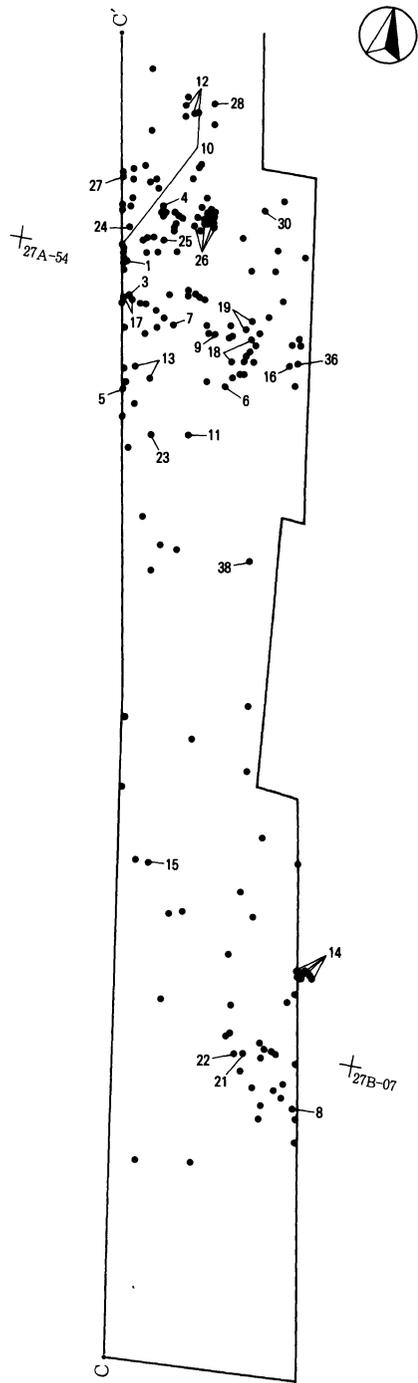
1は坏形土器である。実測番号は11である。遺物番号は82である。色調は内外面ともに橙色である。口径は12.6cm, 底径は7.8cm, 器高は4.0cmである。外面底部周囲はヘラケズリを施している。

2は坏形土器である。実測番号は10である。遺物番号は139である。色調は内外面ともに明赤褐色である。口径は11.0cm, 底径は6.0cm, 器高は4.1cmである。内面は放射状のミガキを施している。

3は坏形土器である。実測番号は8である。遺物番号は23である。色調は内外面ともに赤褐色である。口径は12.0cm, 底径は8.2cm, 器高は4.1cmである。

4は坏形土器で1/4が残存する。実測番号は22である。遺物番号は35である。色調は内外面ともに橙色である。口径は12.0cm, 底径は6.9cm, 器高は3.6cmである。底部回転糸切りを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。

5は杯形土器で底部を欠損するが約1/4が残存する。実測番号は23である。遺物番号は59である。色調は内外面ともに橙色である。口径は11.4cm, 底径は6.6cm, 残存器高は2.7cmである。外面はヘラケズリ後



第21図 A区遺物出土状況図

ナデを施している。内面はナデを施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。

6は杯形土器である。実測番号は13である。遺物番号は60である。色調は内外面ともに橙色である。口径は13.0cm、底径は7.6cm、器高は3.8cmである。底部回転糸切りである。

7は杯形土器である。実測番号は12である。遺物番号は3である。色調は内外面ともに橙色である。口径は9.9cm、底径は5.4cm、器高は3.3cmである。底部回転糸切りである。

8は台付杯形土器である。実測番号は9である。遺物番号は81である。色調は外面は鈍い褐色で、内面は明褐色から黒色である。口径は10.5cm、底径は5.8cm、器高は3.5cmである。内面は黒色ミガキを施している。

9は台付杯形土器である。実測番号は7である。遺物番号は68である。色調は外面は橙色から黒色で、内面は黒色である。口径は9.7cm、底径は4.7cm、器高は3.4cmである。内面は黒色ミガキを施している。

10は高台杯形土器でほぼ完形である。実測番号は14である。遺物番号は41である。色調は外面は鈍い赤褐色から黒褐色で、内面は黒色である。口径は16.4cm、底径は8.8cm、器高は6.6cmである。外面は丁寧なミガキを施している。内面は黒色ミガキを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。

11は高台杯形土器で底部片である。実測番号は21である。遺物番号は34である。色調は外面は鈍い褐色で、内面は黒色ミガキを施している。底径8.2cm、器高は1.5cmである。底部回転糸切りである。胎土は良好である。焼成は良好である。

12は台付皿形土器で口縁片から底部が遺存している。実測番号は18である。遺物番号は89である。色調は内外面ともに橙色である。口径は10.2cm、底径は5.5cm、器高は2.4cmである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

13は高杯の脚部片である。実測番号は20である。遺物番号は181である。色調は内外面ともに明褐色である。底径は5.8cm、残存器高は2.7cmである。内外面ともにナデを施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。

14は高杯の脚部片である。実測番号は19である。遺物番号は117である。色調は内外面ともに橙色である。底径は5.7cm、器高は2.2cmである。内外面ともにナデを施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。

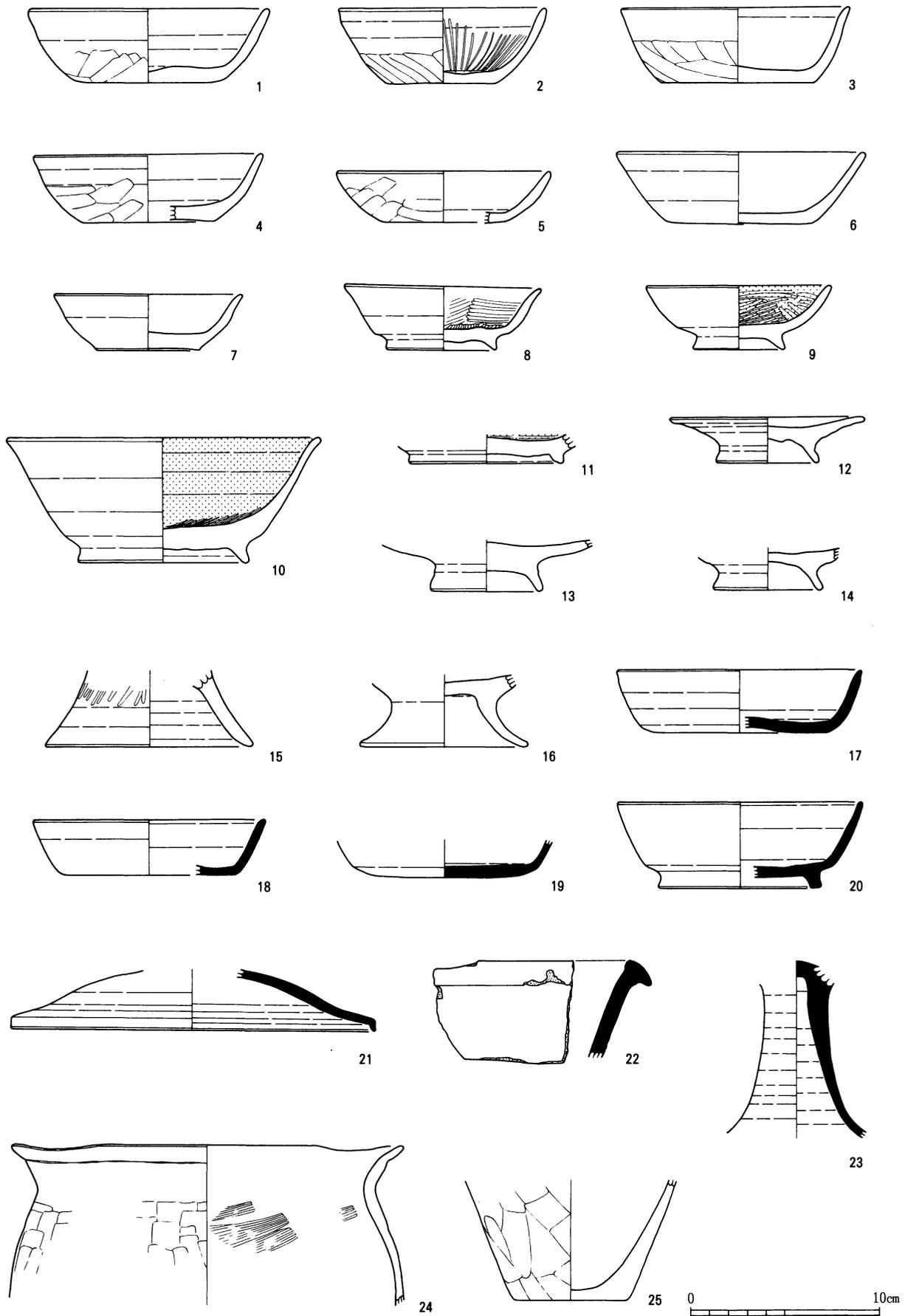
15は高杯の脚部片で1/2が残存する。実測番号は15である。遺物番号は33である。色調は内外面ともに鈍い褐色である。底径は4.2cm、残存器高は10.9cmである。外面はヘラナデ、ヨコナデを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。

16は高杯の脚部である。実測番号は16である。遺物番号は156である。色調は内外面ともに鈍い橙色から灰褐色である。底径は8.9cm、残存器高は3.8cmである。外面はヘラナデ、ヨコナデを施している。内面はミガキを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。

17は須恵器の杯形土器である。実測番号は1である。遺物番号は178である。色調は内外面ともに鈍い褐色から灰黄色である。口径は12.8cm、底径は9.2cm、器高は3.3cmである。

18は須恵器の杯形土器である。実測番号は2である。遺物番号は3である。色調は内外面ともに灰色である。口径は12.2cm、底径は9.0cm、器高は2.9cmである。

19は須恵器の杯形土器の底部片である。実測番号は4である。遺物番号は146である。色調は内外面ともに灰色である。底径は7.8cm、器高は2.0cmである。



第22图 A区出土遗物(1)

20は須恵器の高台杯形土器である。実測番号は3である。遺物番号は179である。色調は外面は灰色で、内面はオリーブ黒色である。口径は12.9cm、底径は8.6cm、器高は4.5cmである。

21は須恵器の蓋形土器である。実測番号は5である。遺物番号は56である。色調は内外面ともに灰色である。口径は19.2cm、器高は3.2cmである。

22は須恵器の甕形土器である。実測番号は6である。遺物番号は91である。色調は外面は灰色であり、内面は灰黄色である。

23は須恵器の高杯の脚部片である。実測番号は27である。遺物番号は165である。色調は外面は灰色から暗灰色で、内面は灰色である。残存器高は9.2cmである。外面はヘラケズリを施している。内面はヨコナデを施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。

24は甕形土器で胴部1/2が残存する。実測番号は26である。遺物番号は121である。色調は外面は橙色で、内面は鈍い橙色から黒色である。口径は20.6cm、残存器高は8.5cmである。外面はヘラケズリを施している。内面はヨコヘラナデを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。

25は甕形土器の底部片で底部の1/2が残存する。実測番号は25である。遺物番号は148である。色調は外面は黒色で、内面は明赤褐色である。底径は6.0cm、残存器高は6.4cmである。外面はヘラケズリを施している。内面はナデを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。

26は甕形土器でほぼ完形である。実測番号は28である。遺物番号は184である。色調は外面は暗褐色から黒色である。口径は20.0cm、底径は4.5cm、残存器高は27.8cmである。外面はタテヘラケズリを施している。内面はヨコナデを施している。胎土は緻密である。焼成は良好である。

27は甕形土器の破片である。実測番号は24である。遺物番号は160である。色調は内外面ともに鈍い橙色である。外面はタテヘラケズリを施している。内面はナデを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。

28は高杯の脚部片である。実測番号は17である。遺物番号は157である。色調は外面は明赤褐色で、内面は黒褐色である。底径は9.4cm、残存器高は4.3cmである。外面はナデを施している。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。

29は平成14年調査の北区から出土した徳利でほぼ完形である。実測番号は1である。遺物番号は1である。色調は外面は黄緑色であり、口径は2.9cm、底径は7.7cm、器高は21.2cmである。外面の釉は底部近くには見られない。胎土は緻密である。焼成は良好である。

30は平瓦片である。実測番号は38である。遺物番号は77である。糸目は10本/1cmである。

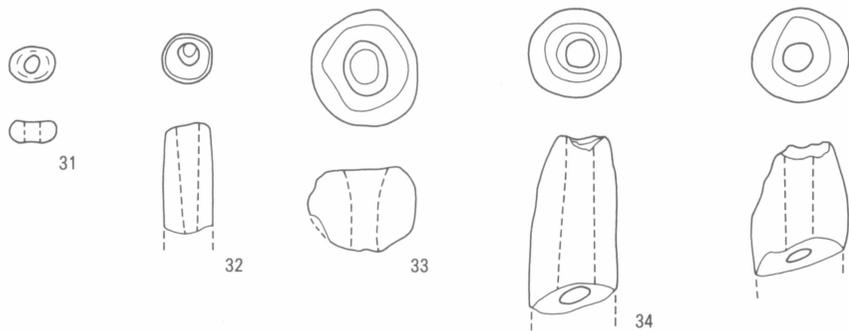
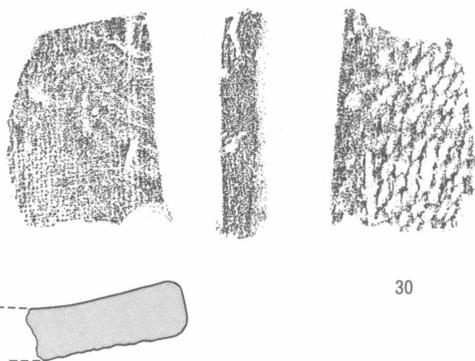
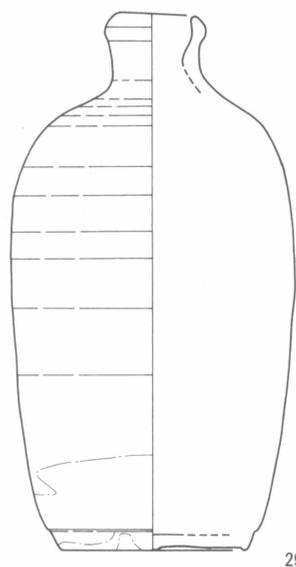
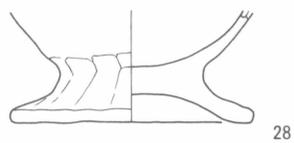
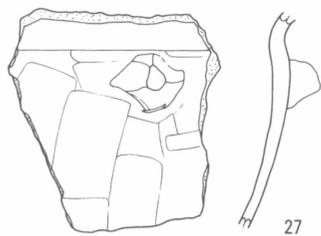
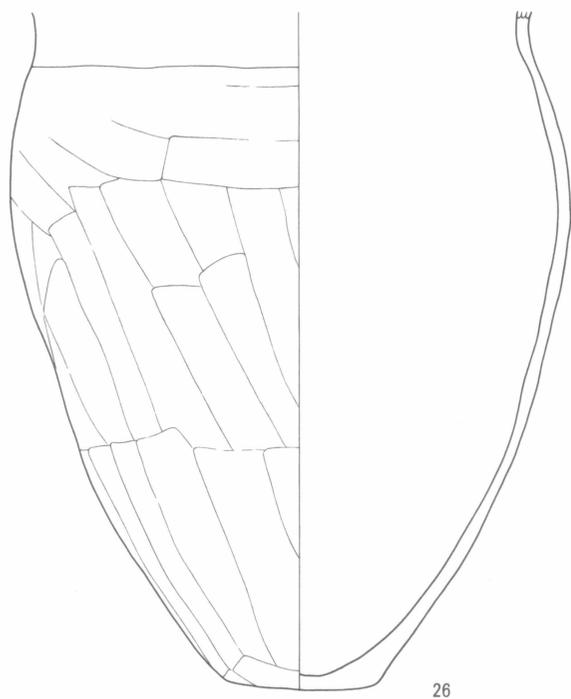
31はガラス玉で完形である。実測番号は36である。遺物番号は15である。色調は外面は明青灰色である。大きさは0.6cm×0.3cmである。

32は管玉で1/2が残存する。実測番号は37である。遺物番号は92である。色調は外面は暗緑灰色である。長さは1.5cm、径は0.6cmである。

33は完形の土玉である。実測番号は31である。遺物番号は2である。色調は外面は黒褐色である。大きさは1.4cm×1.1cmである。

34は筒形をした土錘で約1/2が残存する。実測番号は29である。遺物番号は1である。色調は外面は鈍い褐色である。口径は2.3cm、底径は1.1cmである。

35は筒形をした土錘で1/3が残存する。実測番号は30である。遺物番号は2である。色調は外面は鈍い



第23图 A区出土遗物(2)

褐色である。口径は1.7cm、底径は1.3cmである。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。

### 第3節 遺構外出土遺物（第24図，図版13）

1は杯形土器でほぼ完形である。実測番号は1である。遺物番号は1である。口縁は波状で全体にゆがんでいる。口径は14.8cm、底径は7.2cm、器高は4.8cmである。色調は外面は鈍い橙色から黒色で、内面は鈍い黄橙色から黒褐色である。胎土は砂粒を含むが良好である。焼成は良好である。

2は杯形土器で完形である。実測番号は33である。遺物番号は1である。口径は13.2cm、底径は6.6cm、器高は4.7cmである。色調は内外面ともに橙色から鈍い褐色である。胎土は砂質であるが良好である。焼成は良好である。

3はカワラケでほぼ完形である。実測番号は4である。遺物番号は1である。復元口径は8.7cm、底径は4.8cm、器高は2.1cmである。色調は内外面ともに鈍い黄橙色である。胎土は緻密である。焼成は良好である。

4は台付杯で体部を欠損する。実測番号は1である。遺物番号は1である。底径は6.7cm、残存器高は2.3cmである。色調は外面は鈍い赤褐色で、内面は褐灰色である。胎土は緻密である。焼成は良好である。

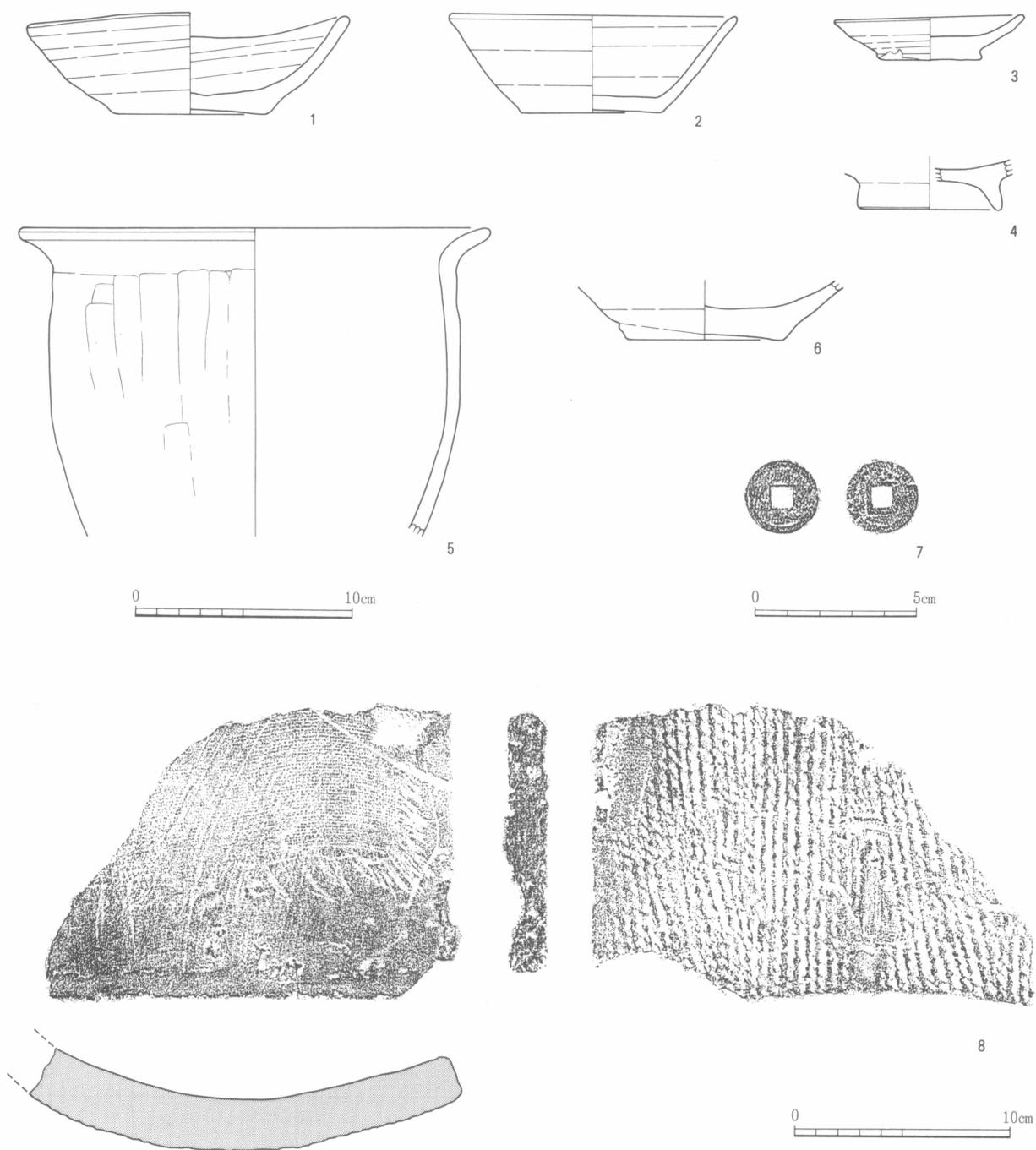
5は甕形土器で胴以下を欠損する。実測番号は34である。遺物番号は1である。色調は外面は黒褐色、内面は鈍い黄褐色である。口径は21.6cm、残存高は14.2cmである。外面はタテヘラケズリ、口縁はヨコナデを施している。胎土は砂粒を含むが良好である。焼成は良好である。

6は杯形土器の底部片である。実測番号は3である。遺物番号は1である。色調は外面は明橙色で、内面は明橙色である。底径は7.2cm、器高は2.7cmである。底部回転糸切りである。胎土は緻密である。焼成は良好である。

7は寛永通宝である。ほぼ完形である。径2.2cmである。

8は平瓦である。実測番号39である。遺物番号は1である。色調は黒灰色で、糸目は9から10本/1cmである。

ほかにスラグが出土している。平成13年度調査のA区の表土層中と、SK-006の覆土中からの出土である。椀形滓の破片であるが、関連遺構の検出はなかった。



第24図 遺構外出土遺物

第1表 郡本遺跡遺構一覧

( )は残存、m+は未掘部分あり

	調査年度	遺構種	旧遺構番号	新遺構番号	グリッド位置	形状・その他特記事項	長径 m	短径 m	深さ cm	出土遺物・ 特記事項	時期
1	平成6年度	溝跡	012	SD-001	第1地点	SD001、SD003は同一方向に向いている、溝底にはピットがあり欄列と推定	?	?			11世紀前半
2	平成5年度	溝跡	012A	SD-001	第1区		?	?	103.2		11世紀前半
3	平成6年度	溝跡	018	SD-001		SD001の続きと推定されるが、別番号を付した。かろうじて南側の壁を確認した。	?	?	57.1		11世紀前半
4	平成5年度	溝跡	012B	SD-002	第1区	上端確認、下端不明	?	?			11世紀前半
5	平成9年度	溝跡	019	SD-003	C地点	SD001、SD003は同一方向に向いている	?	?			奈良・平安
6	平成9年度	溝跡	020	SD-004	B地点	SD005をSD004が切る、SM020が新しい	7.15+	?		中世遺物はない、古代と推定	奈良・平安
7	平成9年度	溝跡	021	SD-005	B地点	SD005をSD004が切る、SD004が新しい	7.15+	?		中世遺物はない、古代と推定	奈良・平安
8	平成5年度	竪穴住居	001	SI-001	第3区	小判型で、北東隅は調査区外、柱穴は3本確認、炉は中央北側	4.95+	4.42	27.5		弥生時代後期
9	平成5年度	竪穴住居	002	SI-002	第3区	耕作による削平で形状は不明	4.3+	1.2+		緑釉陶器皿出土	9世紀後半
10	平成5年度	竪穴住居	003	SI-003	第3区	方形、約1/4残存、南側は調査区外、カマド煙道部が長い	3.55	2.6+	6.6		8世紀中頃
11	平成5年度	竪穴住居	004	SI-004	第3区	隅丸方形か？壁が浅く東側は残存しない、柱穴の位置で範囲を推定、炉は中央やや北よりに位置する、柱穴は主柱穴が4本と小柱穴がある。	5.95+	4.98	21.3		弥生時代後期
12	平成5年度	竪穴住居	005	SI-005	第2区	南西の隅が調査区外、炉は北よりの壁際、柱穴は4本の主柱穴	5.0+	4.7	16.9		弥生時代後期
13	平成5年度	竪穴住居	008	SI-006	第2区	形状は削平されているがほぼ円形により不明、炉と推定、近くに柱穴があり住居跡と推定	0.9+	0.75	15.2		弥生時代後期
14	平成5年度	竪穴住居	010	SI-007	1区	ほぼ方形、北東辺にカマドあり、壁溝が廻る	3.15	2.9	24.3		8世紀後半
15	平成5年度	竪穴住居	011	SI-008	1区	SI007と切り合う、形状から住居跡と推定	3.0+	?	2.7		弥生時代後期
16	平成6年度	竪穴住居	015	SI-009		西側が調査区外、中央に1本柱穴と1個の貯蔵穴らしき穴がある。北辺の調査外との境に土坑がある。覆土からは焼土が見られるが性格は不明。炉か？	3.5	2.9+	15.5		弥生時代後期
17	平成6年度	竪穴住居	016	SI-010		形状から住居跡と推定、柱穴等はない。床面もはっきりしない	2.6+	2.3+	19.7		奈良・平安
18	平成6年度	竪穴住居	017	SI-011		周溝が囲周する。北側は別の遺構の可能性もある。中央に土坑があるが、性格は不明。床面は締まっている。	3.3+	3.0+	39.6		奈良・平安
19	平成13年度	竪穴住居	SI001	SI-012	A区		?	?	53.7		8世紀後半～9世紀初頭
20	平成13年度	竪穴住居	SI002	SI-013	A区		?	?	45.4		奈良・平安
21	平成5年度	土坑	006	SK-001	第2区	他の土坑と切り合う、底面は平ら。	1.2	1.0	29.3		
22	平成5年度	土坑	007	SK-002	第2区	他の土坑と切り合う、底面は凹凸がある。	1.1	0.85	30.5		
23	平成5年度	井戸状遺構	009	SK-003	1区	円形を呈す、SI007とSI008と重複する。土層は3層に分けられ、水平堆積をしている、南側は調査区外	1.25	0.61+	65.1		奈良・平安
24	平成5年度	土坑	013	SK-004	2区		?	?	20.4		
25	平成13年度	土坑	SK001	SK-005	A区		1.6+	1.4	45.3		奈良・平安
26	平成13年度	土坑	SK002	SK-006	A区			?	21.8		10世紀前半
27	平成6年度	塚	014	SM-001		測量のみ実施	10	4	130		

第2表 出土遺物観察表(1)

図版番号	掲載番号	調査年度	遺構番号	新遺構番号	実測番号	遺物番号	器種・器形	色		遺存状態	単位cm( )は復元値		整形・調整		胎土	焼成	備考	分類
								外面	内面		口径	器高・残存高	外面	内面				
5	1	5	001	SI-001	3	15	甕	黒色	黒色	口縁部片	17.5	5.6	頸部ヘラミガキ、輪轆痕あり	砂粒を含むが良好	良好		弥生土器	
5	2	5	001	SI-001	35	1	鉢	赤褐色	暗赤褐色	1/3	22.0	4.8	羽状縄文	良好	良好	平成5年度の3区	弥生土器	
5	3	5	001	SI-001	1	1	壺	赤黒色～明赤褐色	黒褐色	底部片	6.5	6.7	ヘラナア後ミガキ、赤痕あり	緻密	良好		弥生土器	
5	4	5	001	SI-001	2	39	底部	赤褐色～灰褐色	黒褐色	底部片	6.0	5.0	ヘラナア	砂粒を含むが良好	良好		弥生土器	
5	5	5	001	SI-001	8	7	甕	純い赤褐色～明赤褐色	純い黄褐色～黒色	口縁部片			口唇部にキサミ	良好	良好		弥生土器	
5	6	5	001	SI-001	6	1	鉢	明赤褐色	純い黄褐色	口縁部片			口唇に羽状縄文	良好	普通	磨滅している、口縁部縄文押圧、頸部赤彩	弥生土器	
5	7	5	001	SI-001	5	9	壺	明赤褐色	褐色	胴部肩破片			上段縄文帯、下位器縄文帯	良好	普通	磨滅している	弥生土器	
5	8	5	001	SI-001	9	10	壺	純い赤褐色	純い赤褐色	肩部片			縄文施文、赤彩	良好	良好		弥生土器	
5	9	5	001	SI-001	10	1	壺	明褐色	明褐色	破片			羽状縄文	良好	良好		弥生土器	
6	1	5	004	SI-004	3	15	甕	明赤褐色～黒褐色	明赤褐色～黒褐色	口縁から胴部	21.0	13.4	ミガキ	砂粒を含む	良好			弥生土器
6	2	5	004	SI-004	1	38	高杯	褐色	褐色～純い赤褐色	脚を欠く	9.6	6.3	ヘラケズリ後ナア	砂粒を含む	良好			弥生土器
6	3	5	004	SI-004	2	3	壺	赤褐色～黒褐色	赤褐色～暗褐色	底部片	10.2	4.7	ナア	砂粒を含む	良好			弥生土器
6	4	5	004	SI-004	5	44	壺	明褐色	明褐色	口縁部片			タテミガキ	普通	良好	赤彩あり	弥生土器	
6	5	5	004	SI-004	7	1	壺	明褐色	赤褐色	口縁部片			翼条密縄文	普通	良好		弥生土器	
8	1	6	015	SI-009	2	2	壺	純い褐色	褐色	口縁部	14.0	3.5	二重口縁部縄文押圧	緻密	良好	磨滅が激しい	弥生土器	
8	1	6	017	SI-011	2	2	壺	明赤褐色	明赤褐色	頸部		6.2	上部縄文施文	緻密	良好	内外面赤彩	弥生土器	
8	2	6	017	SI-011	6	1	壺	暗赤褐色	暗赤褐色	口縁部片			内面羽状縄文、外面赤彩	緻密	良好		弥生土器	
8	3	6	017	SI-011	5	1	壺	暗赤褐色	暗赤褐色	口縁部片			口縁部羽状縄文、下端キサミ	緻密	良好		弥生土器	
8	4	6	017	SI-011	4	1	壺	暗黒褐色	暗赤褐色	口縁部片			口縁部羽状縄文、下端キサミ	緻密	良好		弥生土器	
9	1	5	011	SI-008	1	6	銅製品			口縁部片	1.4	1.3				針金状のリング	銅製品	
10	1	5	002	SI-002	4	13	杯	褐色	褐色	1/2	12.9	6.3	体部下位はヘラケズリ	緻密	良好		土師器	
10	2	5	002	SI-002	1	20	杯	明赤褐色	明赤褐色	完形	13.4	5.4	底部周囲ヘラケズリ	緻密	良好		土師器	
10	3	5	002	SI-002	3	15	杯	褐色～黒色	褐色～黒色	3/4	13.0	5.5	底部回転糸切り	緻密	良好		土師器	
10	4	5	002	SI-002	2	19	杯	褐色	褐色	ほぼ完形	12.2	5.9	回転糸切り、底部周囲ヘラケズリ	緻密	良好		土師器	
10	5	5	002	SI-002	5	5	杯	褐色～純い褐色	褐色	1/2	13.0	6.5	口唇部	緻密	良好		土師器	
10	6	5	002	SI-002	6	7	輪花皿	暗黄緑色	暗黄緑色	1/2	15.8	8.6	口唇部	緻密	良好	陰刻花文あり	緑相陶器	
10	7	5	003	SI-003	7	6	瓦	灰白色	灰白色	ほぼ完形	13.5	8.7	磨滅しており不明	砂粒を多く含む	良好		瓦	
11	1	5	003	SI-003	1	8	杯	灰黄色	明赤褐色	ほぼ完形	13.2	3.9	磨滅している	緻密	普通	カマドから出土	土師器	
11	2	5	003	SI-003	2	1	杯	灰黄色	純い黄色	口縁部		2.7		緻密	普通		須恵器	
12	1	5	010	SI-007	3	4	杯	黒色	黒褐色	ほぼ完形	12.1	7.2	口唇部	緻密	良好		土師器	
12	2	5	010	SI-007	1	34	杯	褐色～黒褐色	褐色～黒褐色	完形	11.6	8.6	ヨコナア、ヘラケズリ	砂粒を含む	良好			土師器
12	3	5	010	SI-007	2	2	杯	赤褐色～黒褐色	明赤褐色	完形	11.1	7.7	ヘラケズリ	砂粒を含む	良好			土師器
12	4	5	010	SI-007	5	36	杯	赤褐色～黒褐色	赤褐色	底部欠損	12.0	6.1	ヘラケズリ	厚石粒を含む	良好			土師器
12	5	5	010	SI-007	4	32	蓋	明赤褐色	オリブ黒～黄褐色	1/2	16.6	2.1		緻密	良好		須恵器	
13	1	13	SI001	SI-012	1	30	蓋	明赤褐色	褐色	ほぼ完形	12.3	8.4	ヘラケズリ		良好		土師器	
13	2	13	SI001	SI-012	2	11	杯	褐色	褐色	1/3	12.0	7.8	底部回転ヘラ切り	赤茶色粒を含む	良好			土師器
13	3	13	SI001	SI-012	4	29	杯	灰色	灰色	完形	13.0	9.2	底部回転ヘラ切り		普通		須恵器	
13	4	13	SI001	SI-012	5	9	高台付杯	灰色	灰色	底部片		9.4	2.2	口唇部	良好			須恵器
13	5	13	SI001	SI-012	9	20	蓋	灰色	灰色	1/4	14.0	2.0	口唇部	緻密	良好		須恵器	
13	6	13	SI001	SI-012	8	31	蓋	灰色	灰色	1/4	16.0	1.9	口唇部	緻密	良好		須恵器	
13	7	13	SI001	SI-012	10	1	蓋	灰色	灰色	1/5	16.0	2.4	口唇部	緻密	良好		須恵器	
13	8	13	SI001	SI-012	6	34	蓋	灰色	灰色	1/3	21.0	2.7	口唇部	緻密	良好		須恵器	
13	9	13	SI001	SI-012	7	14	蓋	灰色	灰色	1/4	23.1	2.8	口唇部	緻密	良好		須恵器	
13	10	13	SI001	SI-012	3	1	甕	黒褐色	赤褐色	脚部	19.8	9.2	ヘラケズリ	砂粒を含む	普通			土師器

第2表 出土遺物観察表(2)

図版 番号	掲載 番号	調査 年度	遺構 番号	新遺構 番号	実測 番号	遺物 番号	器種・器形	色		調	存在状態	単位cm.( )は復元値 残存高			整形・調整		胎土	焼成	備考	分類
								外	内			口径	底径	残存高	外	内				
14	1	13	SI002	SI-013	1	3	杯	純い黄褐色	純い褐色	純い褐色	1/4	10.2	4.2	2.4	底部回転糸切り	緻密	良好		土師器	
14	2	13	SI002	SI-013	2	1	杯	褐色	褐色	褐色	1/3	9.4	3.8	2.0	底部回転糸切り	緻密	良好		土師器	
14	1	13	SK002	SK-006	1	4	杯	褐色	褐色	褐色	完形	12.6	7.8	3.9	底部回転糸切り	砂粒を含む	良好		土師器	
14	2	13	SK002	SK-006	2	7	杯	褐色	褐色	褐色	3/4	12.0	7.4	4.1	底部回転糸切り、底部 周囲ヘラケズリ)		良好		土師器	
14	3	13	SK002	SK-006	3	8	高台付杯	純い黄褐色	黒色	黒色	1/4	—	8.4	2.7	—	黒色ミガキ	良好		土師器	
14	4	13	SK002	SK-006	4	9	甕	灰色	灰色	口縁部片	口縁部片	—	—	—	波状文	良好		須恵器		
18	1	5	012	SD-001	11	18	皿	褐色	褐色	褐色	1/2	14.2	7.2	4.1	底部回転糸切り	緻密	良好		土師器	
18	2	5	012	SD-001	14	18	皿	明黄褐色	明黄褐色	明黄褐色	1/2	14.1	6.3	4.6	底部回転糸切り	緻密	良好		土師器	
18	3	5	012	SD-001	34	14	杯	純い黄褐色	純い黄褐色	純い黄褐色	完形	13.8	6.0	4.6	底部回転糸切り	緻密	良好		土師器	
18	4	5	012	SD-001	35	17	杯	純い黄褐色	純い黄褐色	純い黄褐色	完形	14.2	6.0	4.1	底部回転糸切り	緻密	良好		土師器	
18	5	5	012	SD-001	19	18	杯	褐色	褐色	褐色	1/4	15.7	—	4.0	—	緻密	良好		カワラケ	
18	6	5	012	SD-001	23	18	杯	純い黄褐色～黒褐色	純い黄褐色～黒褐色	純い黄褐色～黒褐色	破片	12.0	5.6	4.6	—	緻密	良好	線刻あり	土師器	
18	7	5	012	SD-001	17	18	杯	褐色	褐色	褐色	底部1/2	—	6.6	2.5	—	底部回転糸切り	緻密	良好	土師器	
18	8	5	012	SD-001	10	1	杯	褐色	褐色	褐色	底部1/2	—	8.0	2.1	—	底部回転糸切り	緻密	良好	土師器	
18	9	5	012	SD-001	31	18	杯	純い黄褐色	純い黄褐色	純い黄褐色	底部片	—	6.4	1.9	—	底部回転糸切り	緻密	良好	土師器	
18	10	5	012	SD-001	1	1	皿	褐色	褐色	褐色	ほぼ完形	8.0	5.3	1.8	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	11	5	012	SD-001	2	15	皿	純い黄褐色	純い黄褐色	純い黄褐色	ほぼ完形	8.6	5.3	1.9	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	12	5	012	SD-001	3	13	皿	純い黄褐色～黒褐色	純い黄褐色～黒褐色	純い黄褐色～黒褐色	ほぼ完形	8.7	4.7	1.8	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	13	5	012	SD-001	4	5	皿	褐色	褐色	褐色	ほぼ完形	8.4	5.9	2.2	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	14	5	012	SD-001	5	1	皿	純い褐色	純い褐色	純い褐色	口唇部を大 損	7.6	5.4	2.2	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	15	5	012	SD-001	12	18	皿	純い黄褐色	純い黄褐色	純い黄褐色	ほぼ完形	7.4	4.7	1.6	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	16	5	012	SD-001	13	18	皿	褐色	褐色	褐色	ほぼ完形	8.3	4.8	1.5	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	17	5	012	SD-001	18	18	皿	褐色	褐色	褐色	ほぼ完形	8.3	5.3	1.9	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	18	5	012	SD-001	16	18	皿	褐色	褐色	褐色	3/4	8.6	5.0	1.6	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	19	5	012	SD-001	15	18	皿	純い黄褐色～黒褐色	純い黄褐色～黒褐色	純い黄褐色～黒褐色	1/2	8.1	5.0	1.7	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	20	5	012	SD-001	21	18	皿	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	1/4	8.1	5.2	2.1	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	21	5	012	SD-001	20	18	皿	褐色	褐色	褐色	1/3	9.0	5.8	1.9	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	22	5	012	SD-001	22	18	皿	褐色	褐色	褐色	1/4	9.5	5.5	2.0	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	23	5	012	SD-001	7	6	皿	純い黄褐色	純い黄褐色	純い黄褐色	底部	—	5.4	1.3	—	底部回転糸切り	良好	良好	カワラケ	
18	24	5	012	SD-001	8	5	皿	褐色	褐色	褐色	底部	—	5.4	1.1	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	25	5	012	SD-001	9	4	皿	褐色	褐色	褐色	底部	—	5.5	1.2	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	26	5	012	SD-001	33	16	皿	褐色	褐色	褐色	完形	9.1	5.0	1.7	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	27	5	012	SD-001	29	18	杯	純い黄褐色	純い黄褐色	純い黄褐色	底部片	—	5.5	1.1	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	28	5	012	SD-001	30	18	杯	褐色	褐色	褐色	底部片	—	5.7	1.2	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	29	5	012	SD-001	32	18	杯	純い赤褐色～暗赤 灰色	褐色	褐色	底部3/4	—	7.2	1.2	—	底部回転糸切り	緻密	良好	カワラケ	
18	30	5	012	SD-001	24	18	杯	褐色	褐色	褐色	口縁部	—	—	—	—	緻密	良好	カワラケ		
18	31	5	012	SD-001	25	18	杯	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	底部	—	—	—	—	緻密	良好	カワラケ		
19	32	13	A区	SD-001	37	92	平瓦	灰白色	灰白色	灰白色	—	—	—	—	格子模様、11~12本/ 1cm	—	良好	瓦		
19	33	5	012	SD-001	6	10	衆付皿	褐色	褐色	褐色	1/4	10.6	7.2	2.6	—	—	良好	磁器		
19	34	5	012	SD-001	27	18	土鏝	褐色	褐色	褐色	ほぼ完形	4.9	2.2	—	—	—	良好	筒形 筒形	土製品 土製品	
19	35	5	012	SD-001	28	18	土鏝	褐色	褐色	褐色	1/2	4.7	2.1	—	—	—	良好	筒形	土製品	
19	36	5	012	SD-001	26	18	杯	純い褐色	純い褐色	純い褐色	底部片	4.0	3.8	—	—	—	良好	紡織車に転用 あり	土師器	
19	37	5	012	SD-001	36	5	高台付杯	純い黄褐色	純い黄褐色	純い黄褐色	底部片	4.7	4.3	1.6	—	—	良好	用途不明	土師器	
19	38	6	SI018	SD-001	—	—	杯	純い褐色	純い褐色	純い褐色	底部片	—	5.2	1.2	—	底部回転糸切り	緻密	良好	土師器	
22	1	13	A区	A区	11	82	杯	褐色	褐色	褐色	—	12.6	7.8	4.0	—	底部周囲へ ラケズリ)	—	良好	土師器	

第2表 出土遺物観察表(3)

図版 番号	掲載 番号	調査 年度	遺構番号	新遺構番号	発掘 番号	遺物 番号	色		器種・器形	調		遺存状態	整形・調整		胎土	焼成	備考	分類
							外面	内面		外面	内面		口径	底径				
22	2	13	A区	A区	10	139	杯	明赤褐色	明赤褐色						良好		土師器	
22	3	13	A区	A区	8	23	杯	赤褐色	赤褐色						良好		土師器	
22	4	13	A区	A区	22	35	杯	褐色	褐色	1/4					良好	砂粒を含む	土師器	
22	5	13	A区	A区	23	59	杯	褐色	褐色	1/4					良好	緻密	土師器	
22	6	13	A区	A区	13	60	杯	褐色	褐色						良好		土師器	
22	7	13	A区	A区	12	3	杯	褐色	褐色						良好		土師器	
22	8	13	A区	A区	9	81	高台付杯	鈍い褐色	明褐色～黒色						良好		土師器	
22	9	13	A区	A区	7	68	高台付杯	褐色～黒色	黒色						良好	黒色ミガキ	土師器	
22	10	13	A区	A区	14	41	高台付杯	鈍い赤褐色～黒褐色	黒色	ほぼ完形					良好	砂粒を含む	土師器	
22	11	13	A区	A区	21	34	高台付杯	鈍い褐色	黒色	底部から底部					良好	黒色ミガキ	土師器	
22	12	13	A区	A区	18	89	高台付皿	褐色	褐色						良好	緻密	土師器	
22	13	13	A区	A区	20	181	高台付杯	明褐色	明褐色	底部					良好	緻密	土師器	
22	14	13	A区	A区	19	117	高台付杯	褐色	褐色	底部					良好	緻密	土師器	
22	15	13	A区	A区	15	33	高台付杯	鈍い褐色	鈍い褐色	脚部1/2					良好	砂粒を含む	土師器	
22	16	13	A区	A区	16	156	高台付杯	鈍い褐色～灰褐色	褐色～鈍い褐色	脚部					良好	砂粒を含む	土師器	
22	17	13	A区	A区	1	178	杯	鈍い褐色～灰黄色	鈍い褐色～灰黄色						良好		須恵器	
22	18	13	A区	A区	2	3	杯	灰色	灰色						良好		須恵器	
22	19	13	A区	A区	4	146	杯	灰色	灰色	底部片					良好		須恵器	
22	20	13	A区	A区	3	179	高台付杯	灰色	オリーブ～黒色						良好		須恵器	
22	21	13	A区	A区	5	56	蓋	灰色	灰色						良好		須恵器	
22	22	13	A区	A区	6	91	甕	灰色	灰黄色						良好		須恵器	
22	23	13	A区	A区	27	165	高杯	灰色～暗灰色	灰色	脚部					良好		須恵器	
22	24	13	A区	A区	26	121	甕	褐色	鈍い褐色～黒色	胴1/2					良好	砂粒を含む	土師器	
22	25	13	A区	A区	25	148	甕	黒色	明赤褐色	底部1/2					良好	砂粒を含む	土師器	
23	26	13	A区	A区	28	184	甕	暗褐色～黒色	暗褐色～黒色	口縁部欠損					良好	緻密	土師器	
23	27	13	A区	A区	24	160	甕	鈍い褐色	鈍い褐色	破片					良好	砂粒を含む	土師器	
23	28	13	A区	A区	17	157	台付甕	明赤褐色	黒褐色	脚部					良好	砂粒を含む	土師器	
23	29	14	北区	北区	1	1	壺	黄緑色	黄緑色	ほぼ完形					良好	緻密	陶器	
23	30	13	A区	A区	38	77	平瓦								良好		瓦	
23	31	13	A区	A区	36	15	小玉	明青灰色	明青灰色	完形					良好		ガラス製品	
23	32	13	A区	A区	37	92	管玉	暗緑灰色	暗緑灰色	1/2					良好		石製品	
23	33	13	A区	A区	31	2	土玉	黒褐色	黒褐色	完形					良好		土製品	
23	34	13	A区	A区	29	1	土鏝	鈍い褐色	鈍い褐色	1/2					良好		土製品	
23	35	13	A区	A区	30	2	土鏝	鈍い褐色	鈍い褐色	1/3					良好		土製品	
24	1	6	017	遺構外出土	1	1	杯	鈍い褐色～黒色	鈍い黄褐色～黒褐色	完形					良好	緻密	土師器	
24	2	13	A区	遺構外出土	33	1	杯	褐色～鈍い褐色	褐色～鈍い褐色						良好		土師器	
24	3	5	004	遺構外出土	4	1	杯	鈍い黄褐色	鈍い黄褐色	1/2					良好		土師器	
24	4	6	015	遺構外出土	1	1	高台付杯	鈍い褐色～鈍い赤褐色	褐灰色	底部					良好	白砂粒を含む	土師器	
24	5	13	A区	遺構外出土	34	1	甕	鈍い黄褐色	黒褐色	底部を欠損					良好		土師器	
24	6	6	017	遺構外出土	3	1	杯	明褐色	明褐色						良好	緻密	土師器	
24	7	13		遺構外出土	24	7	甕	明褐色	明褐色						良好		銅製品	
24	8	13		遺構外出土	24	8	瓦								良好		瓦	

## 第4章 ま と め

### 第1節 検出された遺構

4年次にわたり実施した発掘調査で竪穴住居跡13軒、土坑5基、井戸状遺構1基、溝跡7条、塚1基を検出し調査した。竪穴住居跡は弥生時代後期が6軒、奈良・平安時代が7軒である。溝は全体で7条が調査されているが、同一の溝状遺構を年度に分けて調査しているため実際の条数は少ない。その中でSD-001とした溝は、郡本遺跡を含む市原郡衙関連の条里制（条坊制）にほぼ一致している。今回の調査では掘立柱建物跡は確認されなかったが、これは調査地区が狭地であるためで、SK-001、SK-002、SK-005（A区）などは可能性がある。しかし、3遺構とも土層断面の検討からは掘立柱建物跡の柱穴とする積極的な根拠はない。従って、今回の調査範囲からは掘立柱建物跡の検出はなかったものと考えている。

### 第2節 出土遺物

#### （1）緑釉陰刻花文輪花皿の特徴と年代観

特記すべき遺物に平成5年度調査SI-002出土の緑釉陰刻花文輪花皿（第10図6）がある。先にも触れたとおり約1/2を欠損しているが、全体の特徴を充分窺える資料である。まず器形の特徴を見ると、口縁部は底部から丸みをもって素直に立ち上がり、底部に高台が付く。底部との接合面は比較的幅が広く、高台端部は僅かに丸く仕上げられている。また、底部外面の高台内側にトチン跡が残っている。輪花を形造る口唇部の摘み出しは弱く、僅かに内側に括れる程度である。釉は全体に掛けられており、色調は暗黄緑色を呈する。また表面に無数の気泡が認められる。調整は丁寧で、特に内面はヘラ磨き調整されている。なお、器面の表裏、特に内面に先端が尖ったもので引っ掻いたような線状の傷が無数に付けられている。廃棄する際に付けたものなのか、廃棄された後で付けられたものなのか判断としない。

陰刻花文は底部内面と口唇部内面に描かれる。底部内面の花卉は半円形の短弁を連続的に5個から6個描いて一つの花弁を表現し、それぞれに短い花糸を1条添える。全体的に丸みはあるが、線が太くやや堅さのある表現である。口縁部には三弁一単位の花弁を扇状に描く。中央に大きな花弁をおき、その左右に対称的に緩やかで丸みのある花弁を添えている。花糸は伸びやかに描かれ口唇部まで達している。口縁部の花卉は底面に比べ細い線で描かれるのが特徴である。

本製品は、胎土や釉の特徴から尾張猿投産と思われる、年代は猿投編年で黒笹90号窯式期併行の9世紀中頃から後半の時期と考えられる<sup>(注1)</sup>。なお、同伴の土師器杯類は口径13cm前後、底径5.5cm～6cm前後、器高4cm前後と定形化しており、底部を回転糸切り離しのままのものと回転糸切り離しの後周縁を手持ちヘラケズリしたもの、或いは底部周縁を回転ヘラケズリ調整したものがある。時期的には器形や調整技法の特徴から、緑釉陶器の年代観とほぼ同じ時期と見て良いと思われる。

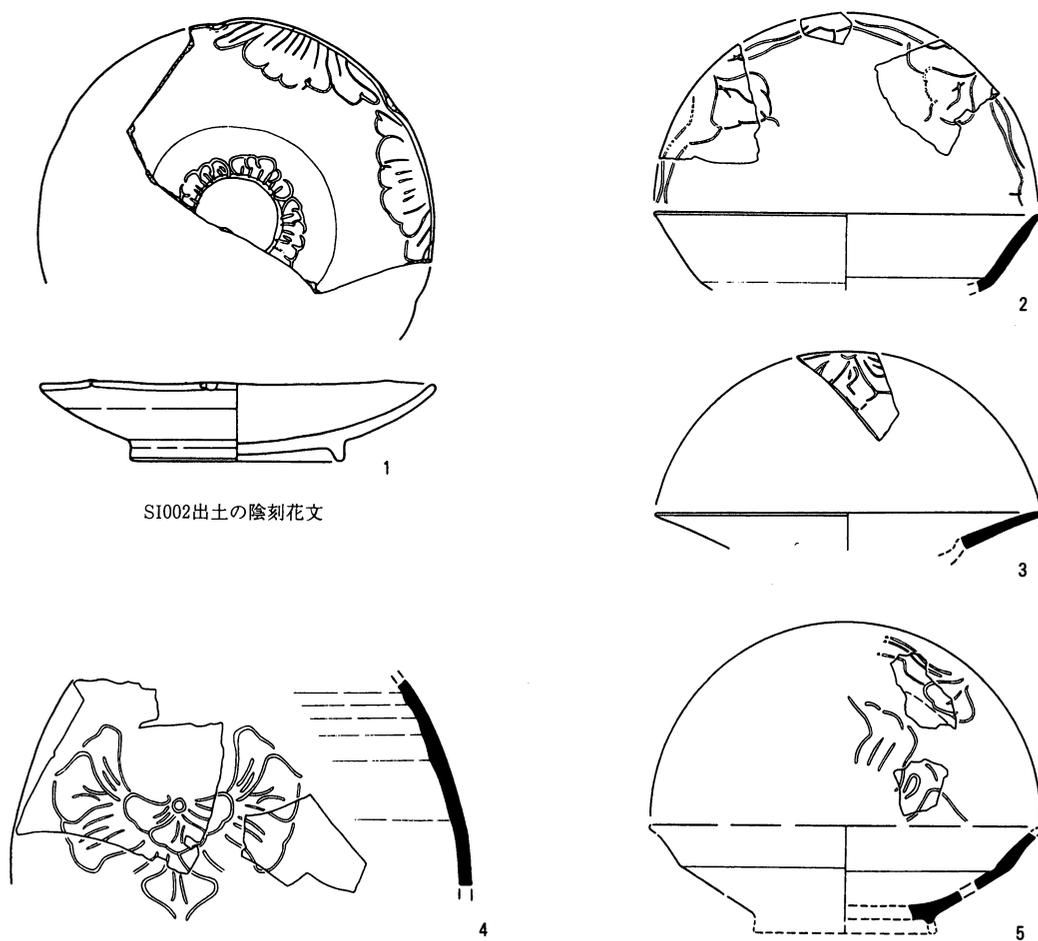
#### （2）類例と比較

緑釉花文陶器の出土例は、官衙跡、寺院跡、集落跡および窯跡など全国的に見ればかなりの数の遺跡から出土しており、器種も椀・皿・壺・瓶類と多種多様である。ただ、器種を皿類として限定すると全国で約40遺跡が知られている<sup>(注2)</sup>。

県内での緑釉花文陶器の出土例は市川市国分遺跡、市原市稻荷台遺跡、同上総国分尼寺跡、同池ノ谷遺

跡に本遺跡を加えて5遺跡であるが、うち4遺跡が市原市域である点は注目されよう。中でも稲荷台遺跡では灰釉陶器など施釉陶器類にまとまった資料が出土しており、緑釉緑彩花文陶器および椀・皿類8点と瓶類9点の緑釉陰刻花文陶器も含まれている<sup>(註3)</sup>。同遺跡では、これらの花文緑釉陶器を猿投窯出土の花文陶器の特徴に基づいて分類しているが<sup>(註4)</sup>、それらと本遺跡の陰刻花文を比較すると花卉の形状、特に花卉先端の描き方に違いが認められよう(第25図)。すなわち、稲荷台遺跡のBタイプ、Cタイプに分類した花文は、花卉の膨らみを2本の線で描いた後に先端を書き加える手法であり、全体的に花卉先端部が尖るような印象であるのに対して、本遺跡の花文では花卉全体を丸く一気に描く手法をとっている。その意味では稲荷台Dタイプとした「花卉が丸く扁平に表現された描き方」<sup>(註5)</sup>に近い印象であるが、断片的な資料である故、全体的な構成が異なる感は否めない。

稲荷台遺跡の緑釉陶器類の産地は尾張猿投産や山城小塩産の製品があり、このうち花文緑釉陶器は猿投鳴海地区の熊ノ前窯や亀ヶ洞窯の製品との類似点が多いようである。分類によれば、前掲BタイプからDタイプの文様変化がおおよそその時間軸に対応し、おおむね9世紀中頃から10世紀初頭の約半世紀に亘り猿投窯の製品が継続的に納入されたとみている。一方、本遺跡の陰刻花文は稲荷台遺跡出土の資料と比較した場合、ほぼ同じ時期の猿投窯産でありながら文様全体の構図や花卉の描き方、特に底部内面の花卉の意



SI002出土の陰刻花文

第25図 陰刻花文の比較

2～5は稲荷台遺跡 Bタイプ 2, 4 Cタイプ 3 Dタイプ 5  
 (『市原市稲荷台遺跡』から転載)

匠に違いがあることが指摘できる。猿投窯における緑釉陶器の生産は、中心的な位置を占める鳴海地区以外の黒笹89号窯や90号窯等黒笹地区でも多量に素地が出土するなど陰刻花文緑釉陶器の生産が盛んに行われていたことが明らかになっており、また地区によってそれぞれに花文の特徴が認められるようである<sup>(注6 a. b. 7)</sup>。ただ本資料と同様の意匠をもった輪花皿は資料的に限られているため、稻荷台遺跡と本遺跡の花文の意匠の違いが生産地(窯跡)あるいは工人の違いによるものなのかどうか、今のところ判断できない。

### (3) 郡本遺跡の位置づけ

さて、本書の冒頭でも触れたように、今回の一連の調査では東西に延びる県道とそれに交差する国道交差点付近の両側、大きく10か所の地点で発掘調査を行った。このうち奈良時代から平安時代の遺構は前節に記したとおり堅穴住居跡、溝跡、土坑などである。S I - 0 0 2 以外の遺構の年代的な位置づけは、出土した土師器杯や須恵器杯から、S I - 0 0 3 = 8世紀中頃、S I - 0 0 7 = 8世紀後半、S I - 0 1 2 = 8世紀後半となろう。また、S K - 6 はA区包含層からの遺物が混入しているが遺構内のより深い位置から出土した内黒処理の高台付椀(第14図3)から10世紀前半に、S D - 0 0 1 は椀類と多量に出土している小皿類などから11世紀前半と考えたい。

本遺跡ではこれまで本書に所収した以外に(財)市原市文化財センターによって5地点の調査が行われている<sup>(注8)</sup>。何れも小規模な調査ではあるが、緑釉陶器が出土したS I - 0 0 2号跡の北西側には規模・時期ともに明確ではないが3棟の直線的に配置される掘立柱建物跡が存在しており、また則天文字や道教思想の影響などを思わせる墨書土器が出土している<sup>(注9)</sup>。また、A地点北側には古甲遺跡が所在するなど、この地が古代上総国府あるいは市原郡衙推定地とされるが故、これに関連する遺跡や遺構・遺物の所在に関心が払われてきたのである。本遺跡で出土した陰刻花文緑釉陶器は、上総国府関連施設としての位置づけがなされた稻荷台遺跡とも密接に関わる資料であり、こうした推定をさらに裏づけるものであろう。

### 注

- 1 緑釉陶器の産地、年代観に関して立和名明美氏の教示を得た。
- 2 『日本の三彩と緑釉—天平に咲いた華—』「特別展 日本の三彩と緑釉—天平に咲いた華—」図録 (財)五島美術館 1998
- 3 浅利幸一ほか『上総国分寺台遺跡調査報告書Ⅸ 市原市稻荷台遺跡』(財)市原市文化財センター 2003
- 4 坂野和信「第5節平安施釉陶器の編年」『上総国分寺台遺跡調査報告書Ⅸ 市原市稻荷台遺跡』(財)市原市文化財センター 2003
- 5 注4に同じ
- 6 a 齊藤孝正「東海地方の施釉陶器生産—猿投窯を中心に—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施釉陶器』古代の土器研究会 1994
- 6 b 齊藤孝正「猿投窯黒笹地区における緑釉陶器生産の展開」『植崎彰一先生古希記念論文集』植崎彰一先生古希記念論文集刊行会 1998
- 7 野本欽也、小澤一弘『黒笹40・89号古窯跡・黒笹G2号古窯跡・立楠古窯跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1994
- 8 北見一弘「郡本遺跡(第5次)」『平成10年度市原市内遺跡発掘調査報告書』市原市教育委員会 1999
- 9 鶴岡英一『市原市郡本遺跡(第4次)』(財)市原市文化財センター 1999

# 写 真 图 版



遺跡航空写真



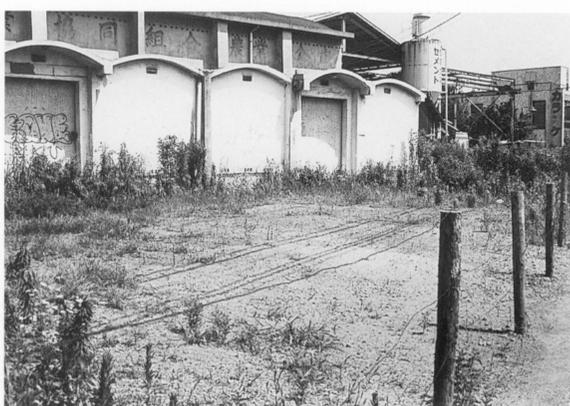
1 調査区近影



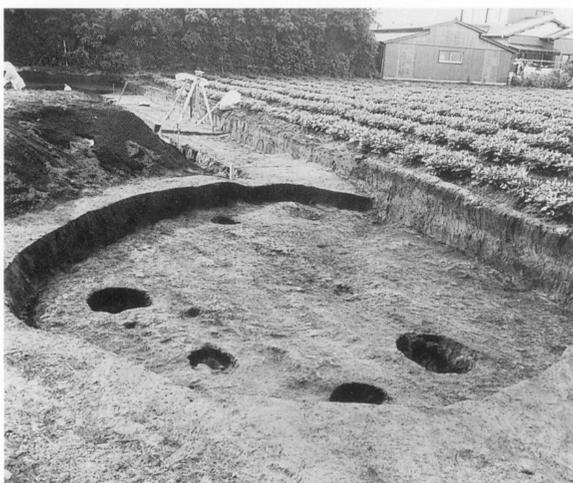
2 調査区近影



3 調査区近影



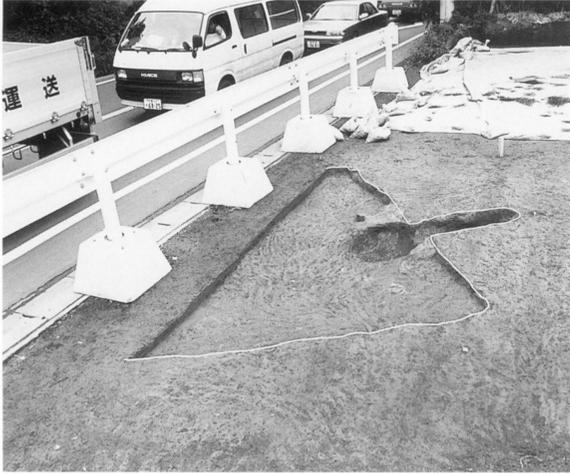
4 調査区近影



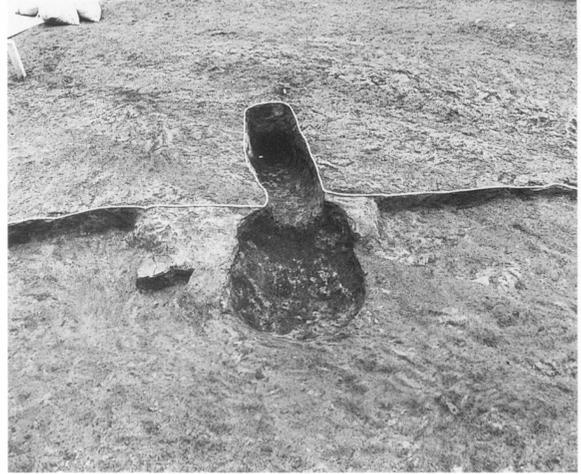
5 SI-001 全景



6 SI-002 全景



1 SI-003



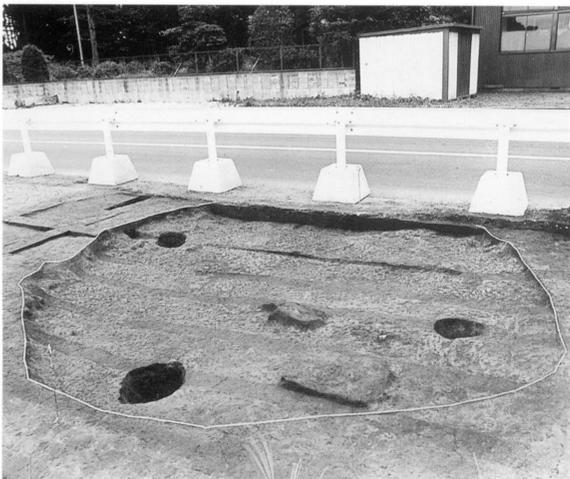
2 SI-003 (カマド)



3 SI-004



4 SI-004



5 SI-005



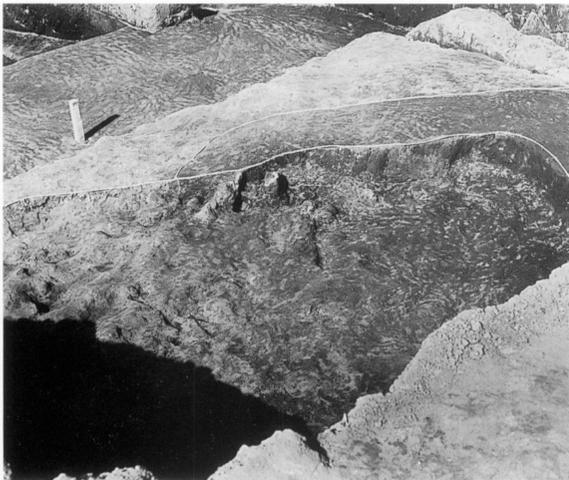
6 SK-001



1 SK-002



2 SI-006 (炉)



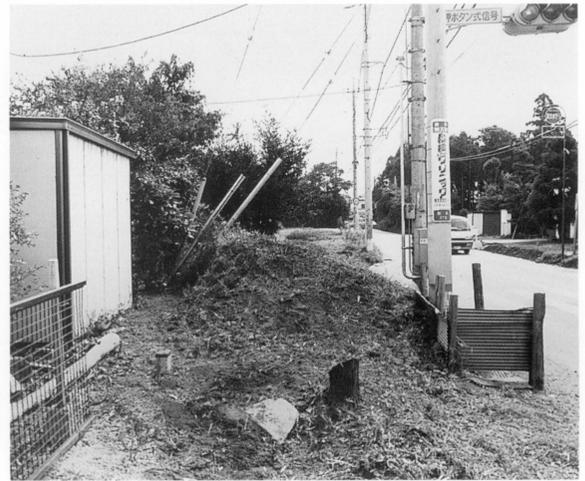
3 SI-007



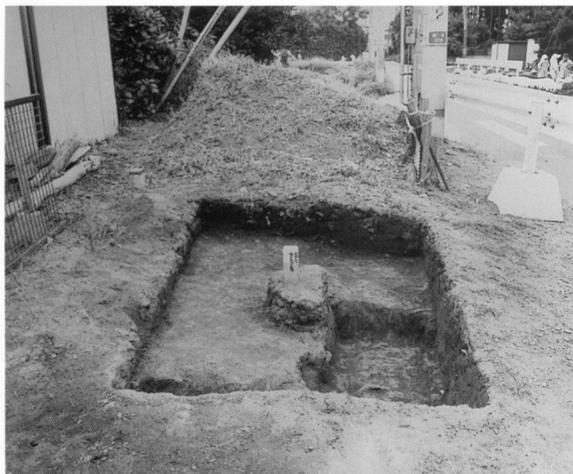
4 SD-001 土層断面



5 SM-001 全景 (東から)



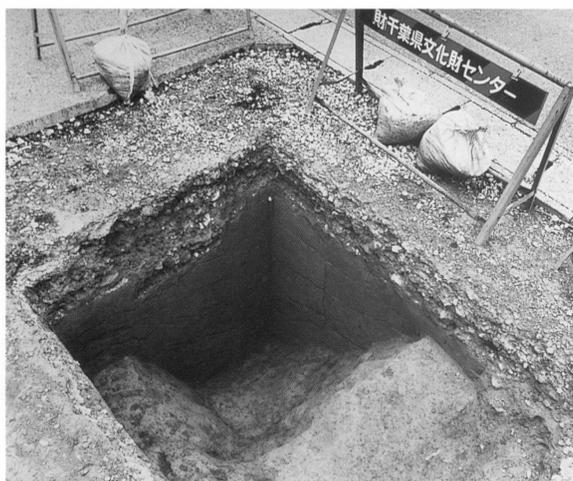
6 SM-001 全景 (西から)



1 SM-001 脇グリッド



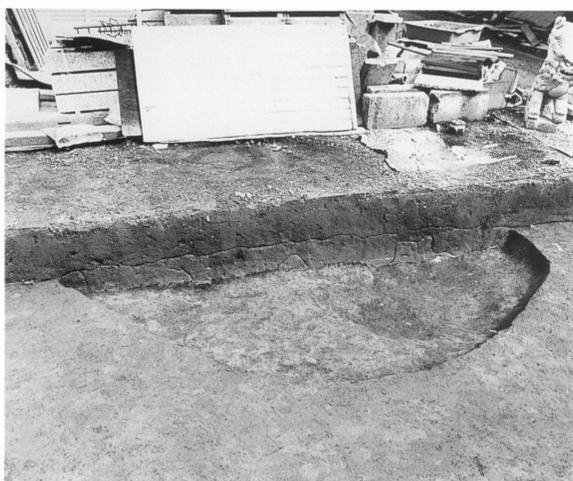
2 SD-001 内ピット



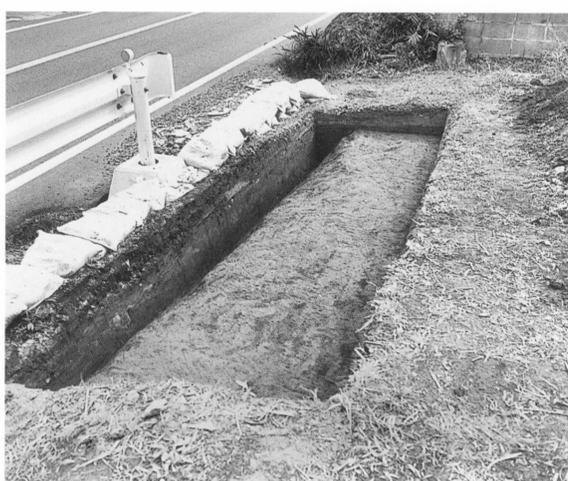
3 SD-001



4 SI-009



5 SI-010



6 SD-001 (018)



1 SD-001 (018)



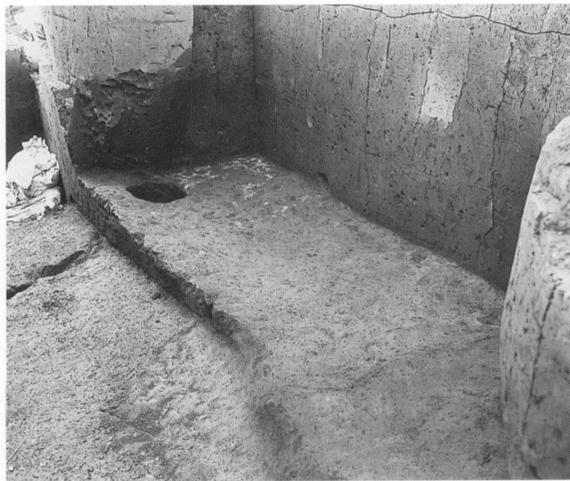
2 SD-002



3 SD-004



4 SI-012



5 SI-013



6 A区 SK-005



SI-001 1



SI-001 2



SI-001 3



SI-001 4



7



6



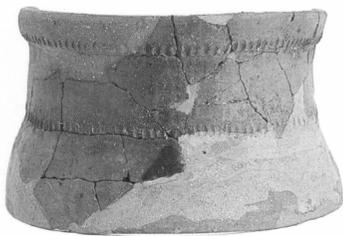
5



8



9



SI-004 1



SI-004 2



SI-004 3



2



3



4

SI-011



SI-002 1



SI-002 2



SI-002 3



SI-002 4



SI-002 5



SI-002 7



SI-003 1



SI-007 1

出土遺物 SI-001 · 002 · 003 · 007 · 011



SI-007 2



SI-007 3



SI-007 4



SI-007 5



SI-012 1



SI-012 2



SI-012 3



SI-012 4



SI-012 5



SI-012 6



SI-012 7



SI-012 8



SI-012 9



SI-012 10



SI-013 1



SI-013 2



SD-001 1



SD-001 2



SD-001 3



SD-001 4



SD-001 5



SD-001 7



SD-001 10



SD-001 11



SD-001 12



SD-001 13



SD-001 14



SD-001 15



SD-001 16



SD-001 18



SD-001 19



SD-001 20



SD-001 21



SD-001 22

出土遺物 SD-001



SD-001 23



SD-001 33



SD-001 33



SD-001 32



24



26



25



8



27



9



28



29



6



36



30



31



34



35



34



35



33



32



31



7



SD-001 37



A区 1



A区 2



A区 3



A区 4



A区 5



A区 6



A区 7



A区 8



A区 9



A区 10



A区 11



A区 12



A区 13



A区 14



A区 15



A区 16



A区 17



A区 18



A区 19



A区 20



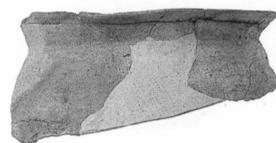
A区 21



22



23



A区 24

出土遺物 A区



A区 25



A区 26



A区 28



A区 27



A区 30



4

SI-004



5

SI-004



2

SI-003



SI-009 1



SI-011 1



SK-006 1



SK-006 2



SK-006 3



SK-006 4



遺構外出土 1



遺構外出土 2



遺構外出土 3



遺構外出土 4

出土遺物 A区・SI-001・009・011・SK-006・遺構外出土遺物



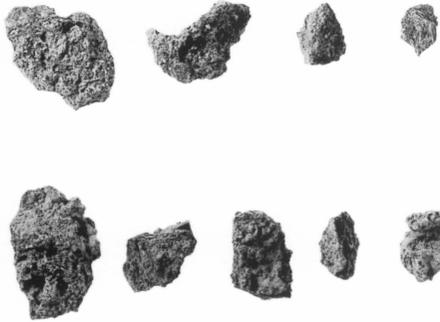
遺構外出土 5



遺構外出土 6



遺構外出土 8



スラグ

出土遺物 遺構外出土遺物・スラグ

## 報告書抄録

ふりがな	いっばんこくどう297ごうこうつうあんぜんしせつとうせいびいたくまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	一般国道297号交通安全施設等整備委託埋蔵文化財調査報告書							
副書名	市原市郡本遺跡							
巻次	第491集							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号								
編著者名	相京邦彦 伊藤智樹							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 Tel 043-422-8811							
発行年月日	西暦2004年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
こほもといせき 郡本遺跡	ちばけんいちばらしこほもと 4丁目166ほか	219	065	35度	140度	19930801～19930831	479m <sup>2</sup>	交通安全 施設整備
				30分	07分	19940901～19941017	651m <sup>2</sup>	
				31秒	41秒	19970801～19970829	81m <sup>2</sup>	
						20010701～20010821	709m <sup>2</sup>	
						20020801～20020830	452m <sup>2</sup>	
						20030107～20030117	58m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 跡		主 な 遺 物	特 記 事 項		
郡本遺跡	包蔵地	旧石器時代			フレイク			
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡	7 軒	弥生土器			
	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡 土坑 井戸状遺構 溝状遺構	6 軒 2 基 1 基 7 条	緑釉陶器 土師器 須恵器 管玉 瓦			
	集落跡	時期不明	土坑 塚	3 基 1 基				

千葉県文化財センター調査報告第491集  
一般国道297号交通安全施設等整備委託(埋蔵文化財調査)報告書  
－ 市原市郡本遺跡 －

---

---

平成16年3月25日発行

編 集	財団法人 千葉県文化財センター
発 行	千 葉 県 土 木 部 千葉県千葉市中央区市場町1-1 財団法人 千葉県文化財センター 千葉県四街道市鹿渡809-2
印 刷	大和美術印刷株式会社 千葉県木更津市潮浜2-1-10

---

---